

第 60 回国際学生会議

The 60th International Student Conference

事業報告書

世界が向かう未来

—「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと—

~Decisions for the future

we make today~



第 60 回国際学生会議 事業報告書

日本国際学生会議

目次

第1章 国際学生会議	1
実行委員長挨拶	2
開催目的	3
国際学生会議の沿革	4
第2章 第60回国際学生会議	5
概要	6
総合テーマ	8
日程	9
プログラム全体の流れ	10
参加者名簿	12
スタッフ名簿	14
事後報告会について	16
第3章 事前研修旅行	18
事前研修旅行総括	19
第4章 本会議	30
分科会総括	31
総務総括	65
各プログラム報告	66
第5章 感想	72
ISC60の感想	73
ディスカッションに対するフィードバック	81

第 1 章 国際学生会議

実行委員長挨拶
開催目的
国際学生会議の沿革

実行委員長挨拶

拝啓 時下益々ご清栄のこととお慶び申し上げます。

この度、2014年8月21日から9月1日の12日間にかけて、第60回国際学生会議を開催いたしました。開催にあたりましては多くの財団様、後援団体様、そして個人の方からも多大なるご協力をいただき、大変感謝しております。多くの方にご指導ご鞭撻いただき、本会議を開催することができました。

本年度は、総合テーマとして「世界が向かう未来 - 「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと - 」を掲げました。これから目指していくべき社会とは、どのようなものなのか。次のバトンを引き継ぐ存在である、世界中の学生が、日本に集い議論を重ねました。多様な視点が集まったことで、議論は想像以上の盛り上がりを見せました。議論を重ねるほどに、微妙な差異が顕在化し、それを乗り越えていくことで、少しずつ、向かうべき未来の姿が浮かび上がっていきました。当然のことながら、向かうべき未来が完璧に描けるということはありえません。しかし、答えに近づく努力は必要不可欠なものです。本会議は、その一助となったはずです。この過程に終わりはありません。本会議が価値を発揮するかどうかは、参加者はもちろん、この報告書を読んでいる方を含め、関わって頂いた方にどれだけ世界の未来について考えて頂けるかに大きく依っています。この報告書に載っている内容は、会議の中で描かれた内容をまとめたものです。それは言わば草稿です。是非、自分ならどのような未来を描くのか考えながら読んで頂けると幸いです。

国際学生会議が、これからのすばらしい未来につながる一つのステップとなれることを心から願っています。

敬具

2014年9月吉日
第60回国際学生会議実行委員長
安田 洋介

開催目的

ISC60 の中心としているテーマは、「世界が向かう未来 - 「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと - 」です。社会の移り変わりが大規模化、高速化している現在、その変化に振り回される人々、組織が多く存在します。こういった激しい変化に振り回されてしまうと、活動に整合性がとれなくなり、一貫した価値を社会に提供することが出来なくなります。しかし、こういったなかで、活躍している人や組織を見てみると、目標が明確で、価値のあるものとなっている場合がとても多いです。明確な目標を描くことは、社会に振り回されない強い軸を持つことにつながります。

特に、学生において「何をめざすのか」という問いは重要です。なぜなら、これからの社会を担っていくことになる存在であり、次のパラダイムを形成していく役割を持つからです。世代が変わることで、引き継がれるべきこともあれば、変えなければならないこともあります。我々の世代が何を引き受け、何を大切に、何を変えていくのか。このことは、我々だけではなく、後々の世代に大きな影響を及ぼします。我々は「未来」という大きな責任を担っているのです。

さらに、現在では、日本というスケールだけで考えていては、価値のある未来は創造できません。なぜなら、世界中の無数の現象が複雑にからみあっているため、国内においても、国外から受ける影響が無視できるスケールではないからです。また、その影響は今後一層、大きくなっていくでしょう。こういった社会において、目指すべき未来を考えるためには世界の多様な視点に触れながら深く考えることが必要不可欠です。国際学生会議は、世界中から学生を集めることにより、世界の多様な視点に触れられる場を作ります。そこで、我々が課題としているテーマにおいて議論をしてもらうことで、未来を創っていく上での軸を見出します。それを発信し、社会が価値のある未来に向かっていくように動かすことが ISC60 の目的であり使命です。

国際学生会議の沿革

国際学生会議の母体は、1934年に始められた日米学生会議にあります。日米開戦前夜両国の関係の悪化を憂える学生有志が奔走し、「世界の平和は太平洋の平和、太平洋の平和は日米間にあり、然してこの現実には若き日米学生の間においての率直な意見の交換、及び、相互理解の信頼を促進しなければならない」という提唱文の下に、第1回日米学生会議が青山学院大学において行われました。会議は1940年まで続けられましたが、1941年の日米開戦により中断の憂き目を見ることとなりました。戦後、日本の新しい胎動の中で、1947年に戦争の反省を踏まえ、「各国の親善と正しい理解こそが国際平和達成への唯一の道である」という認識の下、第8回日米学生会議が日本で開催されました。その後、1954年にアメリカで行われた第15回会議を最後に日米学生会議は解消され、国際学生会議へとその流れは継承されました。日米学生会議は、1964年にOBの手により再結成され現在も行われています。

第1回国際学生会議は、1954年に12カ国から84名の外国人の参加を得て、28日間にわたり東京、関西、北海道、仙台で行われた。以後国際学生会議は、国際政治、経済、社会、文化などの多方面からの活発な討論と研修旅行を行って発展していきますが、その時々の世界情勢とともに多くの屈折を経ています。1962年の第9回国際学生会議では、従来の本会議、研修旅行に加えて、団体代表者会議が新しく設けられ、会議をより有効なものにするために、決議をもって団体間の具体的協力活動を提起しました。それによって、以後の会議の充実と参加団体間のより強い結束を目指しました。1968年には、学生運動のなか日本国際学生協会の中央委員会が分裂し、翌年の国際学生会議は行われませんでした。1970年には会議が再開されました。第32回においては、日本人参加者選抜制度を廃止し、国際学生協会員への国際交流の場を広げました。また、第37回では、帯広市とのタイアップにより、市民の方と国際交流の体験を共にしました。そして第43回には参加国が計16カ国に上がる成果をあげました。第45回においては、多岐にわたる分野から専門家をお呼びして、議論する機会を設けることで社会との関連をさらに深めました。

第2章 第60回国際学生会議

概要

総合テーマ

日程

プログラム全体の流れ

参加者名簿

スタッフ名簿

事後報告会について

概要

会期・場所	<ul style="list-style-type: none">・事前研修旅行 8月21日～24日 (京都、大阪、神戸、岡山、九州の各地で開催)・本会議 8月25日～9月1日 (国立オリンピック記念青少年総合センター)
総合テーマ	『世界が向かう未来 —「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと—』
分科会テーマ	<ul style="list-style-type: none">・都市の未来の創造 —住民一人ひとりの幸せのために—・社会における芸術の価値とは? —アートの可能性—・情報化社会におけるマスメディアのあり方 —マスとソーシャルの融合—・個人の権利が守られる範囲—一人一人を尊重する社会を目指して—
ねらい	様々な価値観、考えを認めあうことで真の相互理解を達成すると同時に、各国を代表する学生がISCのプログラムを通して学び成長する。また、開催国である日本の素晴らしさを体験し、世界へ発信する。
公用語	英語
参加者	日本人学生 34名 (内、実行委員 15名) 外国人学生 18名
参加費	日本人学生 5万5千円 外国人学生 2万5千円
内容	分科会における問題提起、議論 成果発表会 (サマリー発表) 日本文化体験/各国文化紹介/各種交流会

ISC60 参加大学

東京大学、首都大学東京、東京女子大学、東京都市大学、早稲田大学、
慶応義塾大学、明治大学、立教大学、青山学院大学、津田塾大学、亜細亜大学、
筑波大学、創価大学、信州大学、神戸大学、関西学院大学、神戸女学院大学、
同志社大学、立命館大学、大阪府立大学、奈良女子大学、札幌学院大学
(計 22 大学)

ISC60 参加国・地域

イスラエル、インドネシア、コロンビア、台湾、日本、ニュージーランド、
フィリピン、フィンランド、ベトナム、マレーシア
(計 10 ヶ国)

主 催 日本国際学生協会
(I. S. A. : The International Student Association of Japan)

助 成 国際教育振興会賛助会
双日国際交流財団
平和中島財団
三菱 UFJ 国際財団

協 賛 ISA ランムロサティ
高木 英雄 氏
福家 正浩 氏
高宮 純一 氏

後 援 外務省
国際教育振興会
経済人コー円卓会議日本委員会
日本国際協力機構

総合テーマ

世界が向かう未来

- 「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと-

近年、社会の活動は、国という枠組みを超えて、世界規模で行われるようになってきています。さらに、科学技術、社会インフラの発展により、社会の変化のスピードもこれまでにない速さになっています。そんな中、我々学生は社会に出て行くこととなります。

我々学生に求められているのは何なのでしょう。「グローバル人材」という言葉が言われて久しいですが、それが何を意味するのか明確ではありません。実際に、今、社会に求められているのは、「未来を創出できる人材」だと考えています。この不安定な社会において、世界が進んでいくべき道を指し示すことは、これまで以上に求められています。そして、それは、とても学生が行うにふさわしいことであるでしょう。なぜなら、学生というのは、社会を客観的に見つめやすい立場にあるからです。

国際学生会議は、何を提供すべきなのでしょう。我々の導いた答えは、「未来を創っていくための場」です。我々が主体となって、「自分達」の未来を創るための一歩とするのです。「これから」を担う学生が、未来について真剣に議論することで得られる結論は、社会にとって非常に示唆に富んだものにもなるはずです。このような思いを込めて、「世界が向かう未来-「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと-」というテーマを設定しました。

日程

事前研修旅行		
8月21日(木) 8月22日(金) 8月23日(土) 8月24日(日)	大阪・神戸・京都・岡山・九州 各地にて開催	
本会議		
8月25日(月)	開会式・基調講演 分科会1 ウェルカムパーティー	国立オリンピック記念青少年総合センター
8月26日(火)	分科会2・分科会3 各国文化紹介	
8月27日(水)	分科会4・分科会5 日本文化体験	
8月28日(木)	分科会6・分科会7 カフェトーク	
8月29日(金)	本会議研修旅行	
8月30日(土)	分科会8・分科会9 分科会10	
8月31日(日)	成果発表会 閉会式 フェアエルパーティー	
9月1日(月)	解散	

プログラム全体の流れ

2013年

11月 第60回国際学生会議実行委員会発足

2014年

4月・5月 説明会

参加者募集のため、関東・関西両地域で大学施設や公的施設を使用して、説明会を実施しました。インターネットでの広報に加え、実行委員と参加者が顔を合わせる説明会を行ったことで説明会参加者に国際学生会議の雰囲気伝えることができました。

5月末 選考

参加者の選考を参加申込書、次段階として面接で行いました。参加申込書では希望のテーブルテーマを選んだ理由やその時点での考えを問い、面接では実際に話すことで伝わってくるモチベーションやコミュニケーション能力、強みや弱みといった、テーブルでディスカッションを行うにあたり重要となる要素を確認しました。また、面接の中で英語力に関しての確認を行うことで会議自体の英語のレベルを保つことにも注力しました。

6月22日 参加者招集会

国内参加者で顔合わせを行い、各テーブルではディスカッションを行いました。目的としては全体での交流を図り、本会議を円滑に進めるためのリレーション構築を行うこと、及び本会議でのディスカッションに備えての英語力の把握と興味範囲の確認、そしてディスカッションに慣れることであり、それらを達成することができました。

7月・8月 各テーブルでの事前勉強会

本会議前に2回の勉強会を国内参加者で実施しました。どのテーブルも事前課題を出すことで効率的に勉強会を進め、議論のための知識を定着させることができました。また、日本人が不得意とする英語での専門用語の確認や、英語でのディスカッション練習を行ったことで、本会議中のディスカッションを円滑に進めることができました。あくまで日本で実施するものであり海外参加者は参加できませんが、同様に課題を

出しインターネット上で共有する、あるいは、日本での事前勉強会の結果を本会議までに共有し意見を出し合うといったことをオンラインで行うことで、意識面・知識面で乖離が起きないように配慮しました。

8月21日～同月24日 事前研修旅行(19頁に詳細を記載)

8月25日～9月1日 本会議(31頁以降に詳細を記載)

※8月31日 成果発表会(サマリー発表)

9月27日、28日 主催団体報告会(16頁に詳細を記載)

参加者名簿

Table 1 都市の未来の創造～住民一人ひとりの幸せのために～

三枝晃貴	慶應義塾大学	Japanese
三田部直樹	創価大学	Japanese
石井智士	明治大学	Japanese
中村春華	奈良女子大学	Japanese
半田麻奈美	津田塾大学	Japanese
Azer Liz Garcia	University of Santo Tomas	Filipino
Phuong Tran	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese
Regina Anjani Karissaputri	University of Indonesia	Indonesian
Thuy Thuc Anh Nguyen	Alto University	Vietnamese
Yi Yin Chin	Victoria University of Wellington	Malaysian

Table 2 社会における芸術の価値とは？～アートの可能性～

小川理紗	関西学院大学	Japanese
太田垣百合子	神戸女学院大学	Japanese
長谷川綾	筑波大学	Japanese
南蒼樹	信州大学	Japanese
Bao Huynh	Ho Chi Minh City University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese
Janna Pereplotchikov	Shamoon College of Engineering	Israeli
Chao-Yang Chen	National Cheng Kung University	Taiwanese

Table3 情報化社会におけるマスメディアのあり方～マスとソーシャルの融合～

黒川恵里子	札幌学院大学	Japanese
才内麻里菜	関西学院大学	Japanese
千葉百合香	立命館大学	Japanese
藤本嵩	東京都市大学	Japanese
柳澤貴	同志社大学	Japanese
Joshua Pradas	University of St. La salle Bacolod City	Filipino
Thu Tran	University of Social Sciences and Humanities	Vietnamese
Irit Zriker	University of Haifa	Israeli
Sakari Hanhimäki	Turku University	Finnish
Jordan Ansell	Victoria University of Wellington	New Zealander

Table4 個人の権利が守られる範囲～一人一人を尊重する社会を目指して～

山岡淳奈	東京女子大学	Japanese
青島莉奈	早稲田大学	Japanese
浅井飛鷹	神戸大学	Japanese
増子詩織	亜細亜大学	Japanese
波多野愛子	東京女子大学	Japanese
Minh Trieu	Ho Chi Minh City University of Medicinesand Pharmacy	Vietnamese
Tran Huynh Ngoc Thao	Ho Chi Minh City University of Pedagogy	Vietnamese
Ma. Aiza A. Oquiana	University of St. La sale Bacolod City	Filipino
Juan Octavian Daniel Sidauruk	University of Indonesia	Indonesian
Leonel Rodriguez	University of Cartagena	Colombian

スタッフ名簿

第 60 回国際学生会議実行委員会

実行委員長	安田洋介	東京大学 3 年
総務 部長	東口未保	関西学院大学 3 年
スタッフ	平岡愛	東京女子大学 3 年
広報 部長	丸田尚道	大阪府立大学 3 年
スタッフ	渡辺明日香	明治大学 2 年
財務 部長	山口友実	関西学院大学 3 年
スタッフ	植村詩織	青山学院大学 4 年
国際渉外部長	岡本亜美	神戸女学院大学 3 年
スタッフ	西川可奈子	関西学院大学 2 年
テーブルチーフ		
部長	伊藤賢次郎	首都大学東京 2 年
スタッフ	山口絵理子	東京大学 2 年
	川原陸	神戸大学 3 年
	長岡れいな	慶応義塾大学 1 年
研修旅行 (ST) 部長	吉田恵美	関西学院大学 2 年
撮影係	山永航太	立教大学 3 年

各支部研修旅行実行委員長

京都支部	畔上知聡	京都女子大学 3 年
大阪支部	矢頭祐典	関西大学 2 年
神戸支部	池上夏帆	神戸女学院大学 2 年
岡山支部	垣見遙	ノートルダム清心女子大学 2 年
九州支部	戸川笑利	北九州市立大学 2 年

日本国際学生協会 中央役員

会長	小山透	神戸大学 3年
中央事務局長	西島本いぶき	神戸大学 3年
財務部長	鶴田宏美	甲南大学 3年
広報部長	吉崎夕貴	関西学院大学 3年
IW 部長	平田晋太郎	関西学院大学 3年
Ex. 部長	坂平美和	関西学院大学 3年

各支部支部長

東京支部長	平岡愛	東京女子大学 3年
京都支部長	北出あさ美	同志社大学 2年
大阪支部長	廣田泰博	関西大学 2年
神戸支部長	霧嶋舞	関西学院大学 3年
岡山支部長	織田安奈	岡山大学 3年
九州支部長	佐々木健人	北九州市立大学 2年

事後報告会について

2014年9月27日に主催団体である日本国際学生協会の全国合宿において、第60回国際学生会議報告会を行いました。国際学生会議の概要や実際の様子を、写真を含んだプレゼンテーション及び映像で報告しました。第60回の概要を雰囲気と共に語ることで、多くの会員が国際学生会議の魅力を理解し、興味を持ったことと考えます。報告会後には、今回第60回国際学生会議ではどのような議論が行われたのかという質問や、次回に参加者としてないし運営側として関わりたいという意見が出るなど、次回の第61回国際学生会議にも繋がる報告会となりました。





第 3 章 事前研修旅行

事前研修旅行総括

各支部事前研修旅行報告

事前研修旅行総括

研修旅行 (ST) 部長 吉田 恵美

1. 事前研修旅行概要

母団体である日本国際学生協会 (以下 I. S. A.) のプログラムの一つである国際学生会議 (以下 ISC) に参加する海外参加者を I. S. A. の各支部 (神戸、大阪、京都、岡山、九州) に派遣し、I. S. A. 会員からの事前研修旅行参加者とともに観光や文化交流を行います。これは各支部の実行委員が企画し、ISC 本会議前に行われるもので、今年は 8 月 21 日から 24 日に行いました。目的としましては、本会議前に海外参加者に日本文化に慣れてもらうことと、国内参加者が彼らと交流できる機会を設けることです。

2. 事前研修旅行意義

事前研修旅行の意義で最も重要なことは、ISC に参加する海外参加者の方々の本会議前に事前研修旅行を通して日本の文化・慣習に触れてから本会議に臨んでもらう事です。

また、企画から参加まで、すべて『学生』が主体となって動くこの事前研修旅行には『学生』ならではの発想と視点から企画された様々なプランがあります。

3. 総括

事前研修旅行を行うにあたって、各支部実行委員長とともに『Draw your possibility～日本から世界へ～』というテーマを掲げ準備してきました。各支部実行委員、海外参加者、国内参加者ともにこの事前研修旅行を通して自身が持つ様々な可能性を見つけ、この事前研修旅行での経験がそれぞれの今後につながる手助けになればいいなという思いからこのテーマに設定しました。また、今年は人と人の交流がより深いものになるように、国内参加者の人数は少なめに設定させていただきました。このことによってこれまでの事前研修旅行とは一味違ったより濃い交流の場ができたのではないかと思います。

最後になりましたが、この事前研修旅行を開催するにあたって企画に携わってくださった各支部実行委員の方々、参加してくださった I. S. A. 会員の方々、協力してくださったすべての方々に感謝致します。今後もこの事前研修旅行が無事開催され、携わってくださるの方々にとって大切な経験になり、世界中に人の輪が広がることを願っています。

神戸支部 総括

実行委員長 池上 夏帆

今年度、私たちは、フィリピンから3名、ベトナムから1名の海外参加者に加え、述べ100名程度の国内参加者とともに神戸事前研修旅行を実施いたしました。Visaの問題もあり、不安もありましたが、無事に海外参加者も日本に到着し、昨年度に比べると国内参加者は少なかったものの、より濃い国際交流プログラムになったのではないかと思います。

神戸は事前研修旅行のテーマを『未来に繋がる神戸 ST(事前研修旅行)』を掲げていました。この『未来への繋がり』には、3つの角度がありました。

1つ目は、気持ちの面での繋がりです。来年も参加したい、事前研修旅行への運営にも挑戦したいと思ってもらえるようなものを目指しました。2つ目は、友情の面での繋がりです。海外参加者、国内参加者の方と事前研修旅行を通して仲良くなってもらえる環境を目指しました。3つ目は、学びの面の繋がりです。事前研修旅行にて英語でコミュニケーションをすることや、事前研修旅行に参加して日本の新たな発見をすることにより、英語でコミュニケーションする楽しさや難しさや、そして日本について改めて考えるきっかけができるような環境を目指しました。それぞれの面での繋がりを持たせたいと考えたため、グループ分けや企画内容を実行委員と共に会議を通して考えました。

そして当日は実行委員も楽しんでいる事が私自身に伝わってきて、本当に良いプログラムになったなと感じました。

私にとって全員が楽しんでいる姿ほど幸せになるものはなかったです。私は昨年度神戸事前研修旅行の実行委員でした。今年度は、実行委員長として実行委員をまとめる仕事をする上で自分らしい実行委員長というものができたなと感じています。ただ単に仕事を振り分けるのではなく私自身ももちろん仕事に関わり、実行委員全員とコミュニケーションを普段からとることにより、意見を実行委員の前で言うことのできなかつた実行委員も、意見を言えるようになり全員が最初の会議に比べて成長したなと感じることができました。

国際交流プログラムの運営の委員長として仕事ができたと、大変嬉しく思っています。参加してくださった方々、本当にありがとうございました。

神戸事前研修旅行参加者の声

松尾 瑠璃

私は神戸事前研修旅行に四日間参加しました。神戸事前研修旅行を選んだ理由は、神戸支部に所属しているけれど大阪に住んでいるため神戸について知らないことがたくさんあり、この機会にわたしも海外参加者と一緒に神戸について知ることがで

きたらいいなと思ったからです。

一日目は初めて会う人ばかりで緊張していました。しかし BBQ などを通して他支部の人も含め仲良くなることができ、楽しかったです。また古墳など普段なら行こうと思わないところにも行くことが出来ていい経験ができました。

二日目は有馬でのミッションゲームで、わたしは海外参加者のうちの一人と同じ班になりました。初めはぎこちなくうまく会話できなかつたりしましたが、日本語が話せたため、日本語で会話したりお蕎麦屋さんにはいったときメニューを海外参加者にも説明したりなど一日目よりも海外参加者と交流できました。

三日目は淡路へ行きました。この日は一人きりでの参加だったので不安でしたが、集合場所に一人で立っていると二日目で同じ班だった海外参加者が話しかけてくれてすごく嬉しかったです。この日もそれぞれ班にわかれての行動でまた二日目とは違う海外参加者と同じ班になることができました。吹き戻しを教えながら一緒に作ったり、お互いつくった吹き戻しを交換したりしました。また北淡震災記念公園に行き阪神淡路大震災について学ぶこともできました。経験していないわたしにとっては学ぶことがたくさんありました。

四日目は白鶴酒造資料館へ行きこんな機会がなかったら知ることがなかったであろうお酒の作り方などを知ることができました。王子動物園でのミッションゲームもあいにくの雨でしたが、海外参加者と一緒にミッションゲームを楽しむことができました。そして最後のフェアウェルパーティーでは海外参加者と写真をとったり、四日間の写真がながれたムービーを見ながら振り返ったり神戸事前研修旅行の四日を締めくくるものとしても素敵な時間を過ごすことができました。

四日間を振り返り、実際に参加してみて四日も神戸事前研修旅行に参加することにしてよかったと改めて思いました。神戸事前研修旅行に参加しなければ知ることにはなかったいろいろな歴史などただ海外参加者と交流するだけでなく、学ぶということが出来るのはいいと思いました。

また四日参加したことにより海外参加者に顔や名前を覚えてもらったのは嬉しかったですし、事前研修旅行に参加した意味があるなと思いました。そして貴重な体験を企画して下さった人たちにも感謝の気持ちでいっぱいです。夏休みの思い出として神戸事前研修旅行に参加することができて良かったです。

《日程》

8月21日：須磨でBBQ, 垂水で五色塚古墳見学、橋の科学館見学、海企画

8月22日：有馬温泉でミッションゲーム

8月23日：淡路島で吹き戻しづくり、北淡記念震災公園見学

8月24日：灘で白鶴酒造資料館見学、王子動物園でミッションゲーム、
三ノ宮でフェアウェルパーティー

大阪支部 総括

実行委員長 矢頭 祐典

最初に、4日間の大阪事前研修旅行の運営に協力をしていただいた実行委員、また数ある事前研修旅行の中で大阪を選んでくれた国内参加者、海外参加者の皆さんに心から感謝の意を表明します。

今年のおおさかせんりゅうりょくは「やっぱ好きやねん、大阪」というテーマのもと、事前研修旅行を通して、大阪に初めて訪れる外国人、東京、九州など遠方の人達はもちろんのこと、大阪に住んでいる人にも改めて大阪の魅力を感じ、現在日本国民の中で薄まりつつある、地域を好きになることから生まれてくる「愛郷心」、「愛国心」を育んでもらおうと考えました。また外国人には日本を好きになってもらい、もう一度大阪に来たいと思ってもらうことを目標としました。その中で様々な国籍の人が交流をすることにより、それぞれの国の素晴らしさを互いに共有し、参加者が様々な価値観に触れ、理解することが真の国際交流につながると考えました。他の支部のテーマを見ると事前研修旅行を自己成長につなげようとするようなテーマが多いですが、やはり大阪は人情と笑いの街だと私は感じており、この街にそのような固いテーマは似合わないと感じました。そのため、大阪支部はあえて柔らかいテーマに設定しようと決めました。

またこれと合わせて大阪事前研修旅行の開会式でもう1つのテーマとして発表したのは、「Osaka Study Tour is not for study, Osaka Study tour is for enjoy!! (大阪事前研修旅行は勉強のためのものではなく、楽しむためのもの)」というものです。我々は、日本人から見ても外国人から見ても「事前研修旅行」や「Study Tour」と聞けば、何か固いイメージを抱いてしまうのではないかと考えました。特に海外参加者の立場に立ってみると、せつかく日本に来て、例えば大阪城がどういう建物であるか、や何が学べるのかと考えるよりも、純粋な気持ちを持って目で見き、耳で聞き、肌で感じながら、参加者各々が観光を楽しめるような4日間にした方が満足するのではないか、というのが我々の総意でした。

当日、我々は上で述べた目標のもと、参加者に楽しんでもらい感動を与えられるような事前研修旅行にできるよう運営に努めました。今回は人数制限などにより国内参加者の参加意識によくない影響を与えてしまうことや、当日様々なトラブルを抱えましたが、無事に参加者が体調を崩すことなく4日間を終えることができました。またベトナム人参加者から「東京も楽しいけれど、あなたたちと大阪で過ごした時間が私の一番の思い出です。」というコメントもいただき、大変うれしく思っています。今回出てきたトラブルや様々な問題点は反省点として来年以降に引き継ぎ、よりよい事前研修旅行を作っていってほしいと願っております。

大阪事前研修旅行参加者の声

渡辺 明日香

私は大阪事前研修旅行の二日目に参加させていただきました。二日目は三つのグループに分かれて、そのグループごとにミッションゲームをしながら奈良を観光するというものでした。私は修学旅行や家族旅行で何度か奈良を訪れたことがありましたが、海外参加者と一緒に観光し彼らが何に驚き、感動するのかを知らずにより新鮮な気持ちで楽しむことができ改めて日本の文化の素晴らしさを感じることができました。また、海外参加者に日本の文化や建築について質問され答えられないことが度々あり自分の知識不足を実感しました。以前は海外へ目を向けることばかりにとらわれていましたが、この経験を通し自国のことについても更に知識を深めていきたいと思いました。このようなことに気づけたことは私にとってとても意味のあることだと思います。

私は日常生活の中で英語を使う機会があまりなく自分の英語に自信がありませんでした。なので、海外参加者と上手くコミュニケーションとれるかとても不安でした。実際、英語を話すことは簡単ではありませんでした。しかし、ジェスチャーを使う、わからない単語があった時には簡単な英語を使って言い換えてみるなど工夫をすることでコミュニケーションをとることができました。今までコミュニケーションをとるためには完璧な英語を話さなければならないという意識があり英語を話すことに少し気後れしていた部分もありましたが、最も大切なことは伝えようとする気持ちと伝えるための工夫、また相手が何を伝えようとしているのか理解しようとする事なのだと気づくことができました。今後はこの経験を生かし、積極的に英語を話す機会をみつけ、英語でのコミュニケーションスキルを高めていきたいと思っています。

《日程》

- 8月21日：大阪北摂 ウェルカムパーティー、BBQ、ボウリング、温泉
- 8月22日：奈良市内 ミッションゲーム、カラオケ
- 8月23日：大阪市内 文化体験、大阪城、スカイビル
- 8月24日：大阪ミナミ ミッションゲーム、フェアウェルパーティー

京都支部 総括

実行委員長 畔上 知聡

今年の京都事前研修旅行には、コロンビア、ベトナム、フィンランドから4人の仲間が来てくれました。この個性豊かでパワフルな海外参加者の皆を中心に、国際交流が活発に行われ、とても濃い4日間を共に過ごすことが出来ました。

今年の京都事前研修旅行は、“Don't be shy! -あなたの一言があなたを変える-”をテーマに、企画作りが始まりました。このテーマに込めた思いは、自分から新しい仲間に積極的に声をかけてほしいというものです。私は、去年の事前研修旅行実行委員の経験から、言語が違う国から来た人に話しかけることは、普段国際交流に慣れていない日本人にとって、一歩踏み出すまでに時間がかかるものだと感じました。しかし、こちらから相手に歩み寄らなければ、せっかくの機会が無駄になってしまいます。まずは、恥ずかしがらずに自分から話そうとする気持ちを持って事前研修旅行に参加してほしいという願いがありました。そして、楽しく和やかで、参加しやすい雰囲気になるような企画を、実行委員と共に練っていきました。

今年から、京都も合宿企画を取り入れました。一泊二日を共に過ごすことで、海外参加者は日本人学生の習慣や雰囲気を直に学ぶことが出来たと思います、また、国内参加者にとっても、2日間ずっと一緒にいたことで、海外参加者との距離がぐっと縮まったのではないかと思います。

4日間を通して、実行委員をはじめ参加者同士が英語での会話を楽しむ姿を見る機会が日に日に多くなっていきました。実行委員と国内参加者、さらには海外参加者の隔てのない空間が、参加者の国際交流に対する苦手意識をなくし参加者同士の交流を活発にすることが出来たと思います。

京都事前研修旅行で経験したことや、そこで学んだ多くのことは、私のこの夏の最高の思い出であり、宝物です。実行委員長として至らない部分も多い中、最後まで一緒に企画を作り上げ、急な予定の変更や参加者に合わせて臨機応変な対応をしながら企画を進めてくれた実行委員の皆には感謝の気持ちでいっぱいです。

また、好奇心旺盛に京都での4日間を過ごしてくれたパワフルな海外参加者、積極的に国際交流を楽しむ国内参加者、皆さんのおかげで今年の京都事前研修旅行は国境や支部関係なく一体となった空間ができたのだと思います。京都事前研修旅行に関わって下さったすべての方々に感謝申し上げます。

ここで出会った新たな仲間との経験がこれからの生活の大きなパワーになると嬉しいです。本当にありがとうございました。

京都事前研修旅行参加者の声

黒木 雄大

僕にとって事前研修旅行は I. S. A. に入ってから最初の大きなプログラムで、英語を話すことや国際交流に興味があったので入会当初から参加することを決めていました。僕は2、3日目と4日目のフェアウェルパーティーに参加しました。2日目は主に海外参加者の方に日本の文化や伝統を知ってもらおうという企画で、僕は実行委員として参加しました。そして、僕は英語が十分に話せないのが、海外参加者の方と仲良くなれるのかと心配に思っていたのですが、実際は一緒に海外参加者の方と日本の遊びを楽しむことを通じてすぐに打ち解けることができました。言葉でのやりとりだけがコミュニケーションではないのだと感じることができました。また、外国人の方と話すことは滅多にないので、色々お互いの住んでいる地域の話などができ、とても貴重な経験になりました。しかし同時に、もし英語を話せたらもっと深い話ができただろうなとも感じたので、英語をもっと深く学ぼうという決意をすることができました。海外参加者の方以外に他支部の方もたくさん参加されていたので、普段あまり関われないような方とも仲良くなれて良かったです。また、実行委員として企画を進めていくことも、周りの方々のサポートもあってなんとか無事に成し遂げることが出来ました。3日目の清水周辺の散策では、同じ班の海外参加者の方が、京都の風景を見て美しいと言ってくれてこっちまで嬉しくなりました。僕たちが観光を楽しむだけでなく、外国人の方と一緒に楽しめたのでそれは良かったかなと思っています。また昼食に鴨そばを食べる際に、海外参加者の方にうどんとそばの違いをみんなで説明したりと、とても楽しいひとときを過ごせました。4日目のフェアウェルパーティーでは、実行委員の方と海外参加者の方との涙しながら別れの言葉を交わされていて、僕まで感極まってしまいました。4日間でこんなに海外参加者の方と仲良くなれる事前研修旅行というプログラムは素晴らしいものだと改めて感じました。

最後になりますが、この事前研修旅行というプログラムに携わることができて本当に良かったと思っています。2日目には事前研修旅行の主催者側として関わることが特に自分としては大きく、貴重な体験ができたと思っています。僕は来年留学のため日本にいないので、再来年また何らかの形で事前研修旅行に携わりたいと思います。

《日程》

8月21日：交流ゲーム、組み紐作り、町屋見学、ウェルカムパーティー

8月22日23日：日本遊び(折り紙・椅子取りゲームなど)、観劇見学、おにぎり作り、花火、肝試し、宿泊、清水周辺散策

8月24日：お好み焼き・白玉団子作り、東寺見学、フェアウェルパーティー

岡山支部 総括

実行委員長 垣見 遥

今回の岡山事前研修旅行には、イスラエル、台湾から各1名とインドネシアから2名の海外参加者、そして約50名の国内参加者が参加してくださいました。全体としては昨年より参加者数が減りましたが、海外参加者と国内参加者がより密に関われたのではないかと思います。

岡山事前研修旅行の今年のテーマは「そうじゃ、岡山へ行こう!! ～平和の鳥、文化の花、仲間の輪～」でした。私は昨年度の岡山事前研修旅行で実行委員をさせていただいた経験から、海外参加者にとっては日本の文化や歴史、国民性を少しでも感じられる4日間に、国内参加者にとっては英語を使ってみることに臆病にならず、事前研修旅行が次の国際交流に挑戦するきっかけとなる4日間にしたいという思いがありました。そのため、今年も岡山事前研修旅行では宿泊企画を取り入れ、海外参加者と国内参加者が少しでも長く関わられるようにしました。また今回は企画範囲を広島県まで広げ、国際交流を通して平和について考える機会を得ました。実際、この宿泊を通して参加者同士が各国の文化や言語を教え合ったり、時にはふざけ合ったりする様子を見て、この国際交流の一つのプログラムに関われたことを本当に幸せに感じ、これからも事前研修旅行がさらに発展し続けていくことを願っています。

私にとって、岡山事前研修旅行で実行委員長をさせていただくのは、人生で初めて任された大きな役割でした。実行委員長という立場は、約半年間、12人の実行委員の仲間と共に毎週会議を繰り返し、企画を一から作り上げ、無事に4日間を終えていく中で、私をたくさん成長させてくれました。反省点もたくさんありますが、この半年間で学んだこと、感じたこと、たくさんの思い出、そして出会ったたくさんの仲間は私の一生の宝物です。これまで支えてくださった方々には感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。今回この岡山事前研修旅行で得た経験を次に繋げられるよう、また新たに頑張ります。

岡山事前研修旅行参加者の声

西村 晃介

私は今年2日目から3日間岡山での研修旅行に参加させていただきました。私にとって例年参加しているこの事前研修旅行は、海外参加者との旅を通して私たちの団体が掲げる「国際交流」の意義を再考する機会でした。また今年は最高学年として最後の参加になりましたので、自身の成長を感じることも目標の一つでした。

広島で訪れた平和資料記念館や岡山後樂園は、何度目かの訪問でありながらこれまでと違った見方ができました。同行する海外参加者に英語で説明をしながら自分の考えを整理することができたのだと思います。4名の海外参加者は皆好奇心旺盛で、道中での何気ない会話も異文化交流の貴重な機会となりました。決して流暢とは言えない英語を用いてのコミュニケーションでしたが、それでも心を通わせることができたのは寝食を共にしたことが大きな要因だと考えます。同じ時間を共有する旅行という研修形態は非常に有効であると感じました。

事前研修旅行を終えて、「普段できない体験ができた」「外国人と英語で交流する楽しさを知った」といった声を他の参加者から聞きました。毎年事前研修旅行後に海外プログラムへの参加する会員も多く、今年も会員にとってこの事前研修旅行が大きなきっかけになればいいなと思います。しかし、一方で「あまり海外参加者と話す機会がなかった」という声もありました。日本人と外国人の人数比はこれからも考えていくべき課題であり、各大学の留学生への広報活動などが望まれます。また国内参加者の積極性のなさも大きな問題であり、これは団体として日々の活動で実践を積んでいくことで解消していくべきだと思いました。

最終日、海外参加者との別れ際、「また岡山に来るよ」「次はインドネシアで会おう」といった言葉を交わしました。短い期間でしたが、再会を望む外国の友達ができただことはこの事前研修旅行で得た一番の財産です。またとない機会を提供してくださった実行委員の皆様、そしてプログラムの成功に力を貸してくださった支援者の方に感謝いたします。ありがとうございました。

《日程》

- 8月21日：ウェルカムパーティー、日本文化体験、千羽鶴作り、美観地区観光、手巻き寿司作り
- 8月22日：広島原爆ドーム、資料館見学、宿泊
- 8月23日：宮島島内ミッションゲーム、杓子作り体験
- 8月24日：岡山に関するゲーム、岡山城観光、後樂園観光、フェアエルパーティー

九州支部 総括

実行委員長 戸川 笑利

今回の九州のテーマは、「新しい出会いの架け橋に」でした。新しい出会いとは主に2つ考えていました。まず、1つ目は、海外参加者と国内参加者との出会いです。事前研修旅行では基本であるからこそ、この出会いを放置しておくのではなく、参加者同士の出会いがよりよい出会いになるようにサポートしたいと思いました。そのために、海外参加者と国内参加者がすぐ仲良くなれるような企画をはじめのうちにしようと考えました。そのひとつとして運動会です。多くの会話が弾みにくいのはじめだからこそ、二人三脚などで距離を縮め、力を合わせてグループを勝利に導こうとすることでぐっと仲良くなってくれるのではと思い企画しました。案の定、企画は大成功となり、とても多くの国内参加者が海外参加者と仲良くなっているようでした。

2つ目は、九州との出会いです。国内参加者の多くが北九州市立大学生である九州事前研修旅行は、大学のある福岡とは関わりがありますが、他県の九州となると関わりが少ないように思います。また、海外参加者にとっても九州の認知度はそれほど高くないと思いました。しかし、九州には魅力が沢山あるので、せつかくの九州事前研修旅行なのでその魅力と出会ってもらい、また九州に来たいと思えるようなものにしたいと思いました。そこで、福岡では大宰府天満宮、熊本では阿蘇中岳火口、大分では夢大吊橋と、三県の有名な観光地を巡りました。どの観光地も九州らしい自然や歴史を感じられるところで、九州のよさを味わってもらえたと思います。

参加者はとても楽しそうに参加してくれていました。私たち実行委員はそれがないよりの喜びでした。特に4日目は、プログラムの内容がゆったりしていて、少し盛り上がるかどうか心配していましたが、国内参加者と海外参加者との話がとても弾んでいて、楽しそうでした。また、その会話も大人数で盛り上がっていたので、私たちの理想図でした。裏方をすることが多かったので、参加者ほども海外参加者と仲良くなることができなかつた私ですが、最後に海外参加者から挨拶にきてくれました。感謝されるととても嬉しかったです。

九州事前研修旅行参加者の声

神志那 宏仁

私は I. S. A. 九州支部で行われた 4 日間の事前研修旅行に参加しました。今回の経験は非常に刺激的でした。私たちは普段海外の学生と深く関わりその文化に触れるという機会が少ないので、世界には日本だけでなく様々な国や文化、人種が存在するというのを忘れがちになってしまっていますが、それを強く感じさせられました。

私は四日間の間ホストになり、ベトナム人の学生さんのお世話をさせていただいたのですが、彼の生活様式には驚かされるが多々ありました。その中でも特に心に残ったことは彼が電気を消して洗面所を使っていたことです。私は何か彼にトラブルがあったのではないかと心配したのですが、彼が言うにはベトナムでは電気は貴重なので少し位のことでは電気を使わないらしいのです。日本人の“もったいない”という考えと少し似通っているなど感じました。

また彼からも質問を受けました。

「君はここに一人で住んでいるの？」と。

私は彼の質問の意図を察し得なかったのですが、彼が言うにはベトナムではルームシェアをして暮らすのが一般的な学生の生活らしいのです。私がそうだと答えると、彼が流石日本だと妙に感慨深く頷いていたのをいまでも懐かしく感じます。

上記のように様々な文化や生活の違いはあったのですが、翻って最も私が驚かされたのは彼との生活においてさほど違和感、あるいは不便感という感覚を抱かなかったことです。この時ほど強くグローバルイゼーションの波を感じたことはありませんでした。本来であればかなりの問題が異文化間の生活にはおきるはずなのですが、生活の根底といえる部分が知らず知らずの内に似通っており、一つの共通文化ともいべきものが私と彼のなかで共有されていたという事実気づかされました。このような様々な変化に敏感である必要ことを改めて感じさせられました。

本当に様々な気づきや出会いがある四日間で非常にたのしかったです。また機会があれば是非参加したいと思っています。

運営された I. S. A 九州支部の皆様そして参加してくれた海外学生のみなさん本当にありがとうございました。

《日程》

8月21日：アイスブレイク、手巻き寿司、運動会、ウェルカムパーティー

8月22日：明太子工場見学、太宰府天満宮参拝、宿泊

8月23日：阿蘇中岳火口見学、夢大吊橋渡り

8月24日：風鈴作り、だるまさんが転んだ、英語かるた、フェアエルパーティー

第4章 本会議

分科会総括

各分科会報告

総務総括

各プログラム報告

分科会総括

テーブルチーフ部長 伊藤 賢次郎

本会議におきましては4つの分科会が無事終了し、成果発表会に至ることができました。参加者の皆様並びに分科会構成にご協力頂いた方々に心から感謝申し上げます。

第60回国際学生会議は「世界が向かう未来」という総合テーマのもと、「都市の未来の創造」、「社会における芸術の価値とは?」、「情報化社会におけるマスメディアのあり方」、そして「個人の権利が守られる範囲」といった4つの分科会のいずれかに各参加者が所属するという形式で開催されました。まず始めにそれぞれの分科会において到達目標が提示され、私たちは協力しながら段階ごとに議論を進めました。多様な文化背景及びに価値観を持った参加者による白熱した議論の中では、共感を覚えるだけでなく、時には意見の違いを実感することもありました。しかしながら、次第に議論を進めていく中で、誰もが相互理解が形作られていく瞬間を体験したのではないかと考えています。また同時に、分科会で設定した諸問題は一国を超え世界で議論されることが重要であることも再確認することができました。それぞれの地域の代表者たる私たちが、まず「今何ができるか」、そして「未来に何ができるか」それらを考え抜いた一週間となりました。世界の構成員の一人である私たちは、未来の世界を担う世代でもあります。この会議で一人ひとりが得られた知識や経験が、将来の国際社会において必ず大きな一手となることを確信しております。

加えて、以上のような各分科会の構成及び本会議中の進行は、実行委員や参加者の協力無しにできるものではありませんでした。本会議前の約8か月間の準備段階において、基本的に個人による学習作業が多いのがテーブルチーフです。故に、第一歩となる分科会におけるテーマ選定に関しては熟考し、テーブルチーフの問題意識と未来の社会に求められるものが交わるよう徹底しました。無事にこうして第60回国際学生会議を成功に終えることができたのも、他のテーブルチーフは勿論、実行委員全員のサポートがあったためです。テーマ選定に始まり、本会議中のテーブル運営や議論スケジュールの面で挫折を味わい悔しい思いをしたこともありました。しかし、参加者の積極的な協力や毎晩に及ぶテーブルチーフ会議により、各分科会のゴールへと近づいていくことができました。長い準備期間と創造性に溢れる本会議での議論を経て、私達テーブルチーフはかけがえのない経験をさせていただきました。この経験を、国際会議の更なる隆盛のみならず、自身の成長にも活かし、将来へと繋げていくことこそ、私達が今すべきことであります。

テーブルチーフ一同、ご協力くださった皆様に感謝の念をお伝え致します。

テーブル I

都市の未来の創造

—住民一人ひとりの幸せのために—

テーブルチーフ：伊藤 賢次郎

① 議題の背景

「都市開発が人類にもたらしたものは社会的創造の根源である。」1920年代のアメリカ合衆国建築家兼都市計画家であったダニエル・パナムはこのような言葉を残しました。都市開発がおよそ100年以上に渡り私たちの生活に恩恵をもたらしてきたことは言うまでもありません。しかしながら、その開発は社会的非効用も同時に生み出してきました。

都市計画の主流が「発展と繁栄」であった20世紀初頭、人類は初めて都市問題に直面しました。1920年頃、アメリカ合衆国やイングランドを中心に爆発的な人口増加に伴う住宅施設不足や食糧危機問題が発生し、その受け皿として植民地政策が進みました。第二次世界大戦後では、特に日本の工業都市において工場排水による水質汚濁、都市部における無計画的なごみ処理の問題が浮かび上がりました。ここ2000年以降では、ジャカルタやクアラルンプールにおける酸性の霧（Haze）などから見て取れるように、大気汚染が最も深刻な環境問題の1つとされてきました。

このように、都市の繁栄は国の繁栄と直結してきた中、様々な都市問題と我々人間は向き合ってきました。しかし、問題解決にあたり、誰に原因追究すればいいのか、誰に責任があるのかという問いにあたり、都市部に住む住人に焦点があてられたことはこれまで余りありませんでした。もしも都市の住民一人ひとりの行動規範を変えることができたとしたら、そこには必ず都市問題の解決に大きな影響をもたらすソリューションがみつかると考えました。

② 背景を受けて

都市と都市問題について考察し、都市の在り方を市民の立場から提言をする、それがこのテーマの目的です。テーマ決定時、少しでも自らの住む都市に興味を持ち、コミットメントを図るきっかけをつくる、そのような意図が筆者にはありました。しかしながら、実際に都市部に集積する人々はいい意味ではその利便性の恩恵を受けつつ、一方で他人への干渉度の低さや過度な忙しさの中で自ら住む都市に帰属意識を感じることも自体無いという声が多い現実があり

ます。都市という多様な主体の集合体を自らの視点で考察し、理解を深める議論を進めていき、最後にそこから得られた学生の考える都市の在り方を社会に提言できるような議論づくりを目指しました。

③ 事前勉強内容

◆ 参加者招集会

この日、6月22日は参加者との最初の対面でした。まずはお互いのことを知ること、そして議論では参加者の意見をうまく構築していくことを心掛けました。午前中はアイスブレイクを行いました。自己紹介タイムを踏まえたロジックツリーから始まり、お互いがどのようなバックグラウンドを持ち、何に興味があり、なぜ国際学生会議への参加を決意したのかを自らを客観視しながら紹介してもらいました。また頭の体操ということで、ディベート形式で「アンパンマンとドラえもん、横に置いておきたいのはどちら」という題で議論を行いました。年齢や性格も大きく異なり、しかも初対面という条件下の中で、チームを1から構築していく模擬体験ができたと考えています。

また、午後にはテーマについての議論を行いました。各自のテーマの選択理由や議論したい内容などを話し合いました。中でももっとも多く出たのが「環境」と「開発」、そして「異文化」というキーワードでした。参加者全員が都市に対する異なる興味を持っており、テーブルチーフとしても共通意見を構築するよう努めました。海外参加者の考える都市についても共有した後、次回会う勉強会までに海外参加者一人と国内参加者一人のタッグ制で調査を進めることを決めたところで参加者招集会は終わりました。



◆ 第1・2回勉強会

テーブル1では、勉強会を8月9日、10日と2日間続けて東京で行いました。1日目はディスカッション、2日目はフィールドワークを実施しました。

参加者招集会後、海外参加者を含めた参加者10人を5つのタッグに分け、それぞれのタッグにつき一つのトピック、「都市環境」、「都市交通」、「アジアにおける都市移民」、「ヨーロッパ、アフリカにおける都市移民」、「アメリカ、オセアニアにおける都市移民」について調べ学習を一か月に及び行いました。

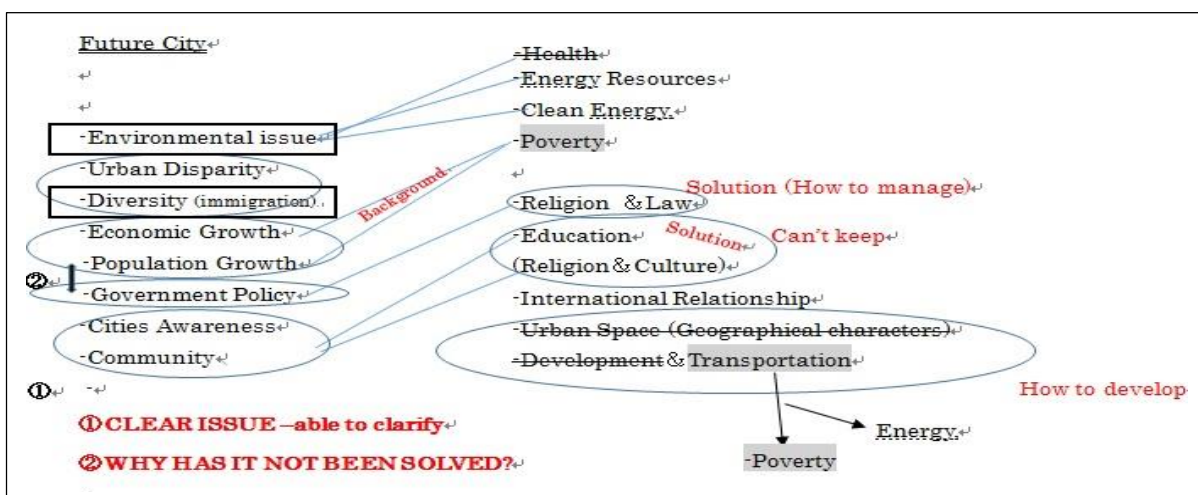
その内容を踏まえ、勉強会 1 日目にまず調べてきた内容のプレゼンテーションを英語で 10 分、質疑応答を日本語で 10 分といった時間配分で一人ずつ発表してもらいました。各自が担当したテーマに関する都市問題を説明し、それに対する政策の現状や市民のコミットメントの有無、問題背景について共有するとともに、本会議に向けた英語でのプレゼンテーションの練習を図りました。

都市環境のテーマでは、開発は環境問題に直結することの再確認、また先進国と発展途上国に対する解決策は分けて扱う必要がある、などを知ることができました。スマートシティを環境に優しい街づくりと捉え、ドイツのリサイクル方式やそれを助ける地域コミュニティの存在などについても意見が上がりました。

都市交通のテーマでは、世界における各都市にある特徴的な交通手段について話し合いました。都市圏が広い日本において、電車の変りとなる交通手段が無いことや、ニュージーランドにおいてバスや自転車による移動が発達していることなど、都市規模と交通の考え方を学習しました。エネルギー面からも、都市交通におけるエネルギー供給先・利用手段を分散させて、災害時に備えるといった提言も見受けられました。

都市移民のテーマでは、各自が調べてきた地域における移民政策の現状と問題について話し合いました。都市における現地人の雇用率の低下や、不法滞在の問題が主にあげられました。他のテーマとの関連性においても、移民が来ることで公共交通が活用されていく反面、人口増加による資源の超過消費、異文化闘争による政策実現の困難さが増すことなどについても考えることができました。

各自の発表内容を踏まえ、1 日目の後半は都市の定義について、未来の都市について、そして今後注目していく問題の決定について議論しました。都市の定義を「一定以上の人口が集まった地域、地方(region)」と定義づけ、未来の都市についてのブレインストーミングを行い、今後の方向性を決めました。



都市を内的要因と外的要因にわけ、人に焦点を当てた都市の多様性の問題を内的なもの、都市環境の問題を外的なものとして位置づけました。「政策提言がなされているのになぜ問題改善に至っていないのか」その視点を共有し、1日目のフィールドワーク先を決めたところで、勉強会初日は終わりました。

2日目は生憎の台風と暴雨で、予定していた2か所の内一か所しか訪れることができませんでした。訪れた日本科学未来館では、環境配慮における先進技術に注目しながら調査を行いました。様々な興味深い科学技術が見受けられた中、特に未来の都市という展示においてヴァーチャルシティの市民を模擬体験することができました。最後にフィールドワークでのそれぞれ得た見解を共有し、1日目に決めた都市の内的問題と外的問題の総合的な解決方法を見つけるべく、10人の参加者を二つのグループに分け、本会議までに調査をすることになりました。

今回の勉強会に向けて、海外参加者を含めた参加者全員がコミュニケーションを必要とする調査を行ったことで、テーブルの団結が増しました。また、本会議に向けて都市に関する理解の構築と議論する都市問題の範囲が決まったことが、この勉強会の成果です。



④ 本会議内容

◆ 分科会1 [アイスブレイクと現状共有]

本会議初日の最初の分科会では、海外参加者と国内参加者の顔合わせということで、アイスブレイクの時間を約30分とりました。お互いの勉強会前のタッグの相手の他己紹介から始まり、無言ジェスチャーゲームなど、身体を使ったゲームなどを行いました。本会議前からお互いが積極的なコミュニケーションをとったおかげか、初対面であったのにもかかわらずすでにチームのような雰囲気が出ていました。

現状の共有では、勉強会後に分けたグループで調べてきた内容について口頭発表をしました。都市環境の班(4人)は主に交通面でのエネルギー利用に関する国民意識、それに加え汚染と貧困の関係性について述べました。都市の多様性の班(6人)は、相互理解能力を構築するにあたり教育に着目し、多様性を実現することで環境、交通政策実行の鍵にすることができるという結論を出しました。これにより、参加者全員が都市を二分し理解をすることをイメー

じることができ、良いスタートが切れたのではないかと考えています。



◆ 分科会 2・3 [都市の外的要素と問題決定]

都市の外的な部分での問題を決定するために、まずその現状を探りました。どのような都市問題が存在し、どれが一番議論に値するのかを決定するのが本会議二日目の目標でした。ここでは主に事前学習の段階で都市環境や交通を担当した参加者に議論を進めてもらいました。まず考えられる環境問題をブレインストーミングと KJ 法で洗い出し、その中で水問題とごみ問題、排気ガスや放射線による大気汚染が上がりました。共通理解として得られたことは全ての都市における環境問題の原因は主に①人口過多②集団的無視③教育システムの3つであると定義することができました。特に集団的無視について、インドネシアでの民家近くのごみの山の例が挙げられ、「皆がやるからそれが普通になっている」という意見がでました。つまり都市において、人口の集積が身の回りの環境問題に対する集団的無視もしくはあきらめのようなムードを構築しているということが理解できました。また、ドイツのようなリサイクルもしくはエコというキーワードが評価されるもの、もしくは格好がいいというような意識づけが住民に対して行われている国と、前例で上げた発展途上国を比べた場合、問題意識自体に大きな差があることも学ぶことが出来ました。

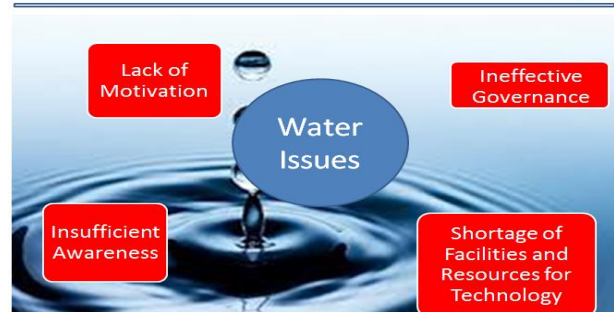
以上の議論から、分科会 3 では外的要素として議論が必要な問題を都市における水問題とすることにしました。選定理由は、国の状況に問わず都市において水という資源は不可欠であることと、人間が使用することのできる地球上の水資源の内約 6 割を都市で利用しているという背景があるからです。水問題を「水質汚染」と「水不足」の 1 つに分けて、グループに分かれ調査を行いました。本会議 2 日目の分科会はそこで終わり、明日の分科会でそれぞれの調べてきた内容を発表するという宿題を出す結果となりました。

◆ 分科会 4 [外的要因に対する提言]

本会議 3 日目の午前中は、外的問題の提言を考えることを目標としました。水質汚染に対しては、水管理に関する知見を啓発するとともに、環境負荷の少ない水の利用方法とその動機づけのための料金システムを考えました。

水不足の問題については、技術を持った都市とそうでない都市を繋げ、技術移転を行うと共に、それを監視する独立機関を置くことで、両都市のメリットを保証する行政システムを考案しました。

Cause for Water Issues



◆ 分科会 5 [都市の内的要素と多様性の問題]

本会議 3 日目の午後は、都市の内的要素である多様性の問題について考えました。少子化が進む都市（を保有する国）において移民政策が進められている例があがり、どの都市でも多様な価値観が存在する段階になると多様な人種を受け入れざるを得ないという結論に至りました。そんな中、議論に値する問題として移民政策の阻害要因となる「政府による就労規制」と「企業による労働環境の押しつけ」を選びました。

◆ 分科会 6 [都市の多様性実現への提言]

政府側の対策として、人材移民という提言が得られました。自らが属する都市から移民先の都市へと移動する際に、本人の資格や学歴、就労経験などの評価を数値で表し、受け入れ先の都市の企業の雇用を判断しやすくすることができます。また、企業側の対策として、宗教的理解を深める社内教育を行うことで、都市の動力源である企業内の多様化を進めることができるとしました。これらを実現することにより、都市の多様性は実現され、外的問題である環境問題へのアプローチも現状より容易になると考えました。

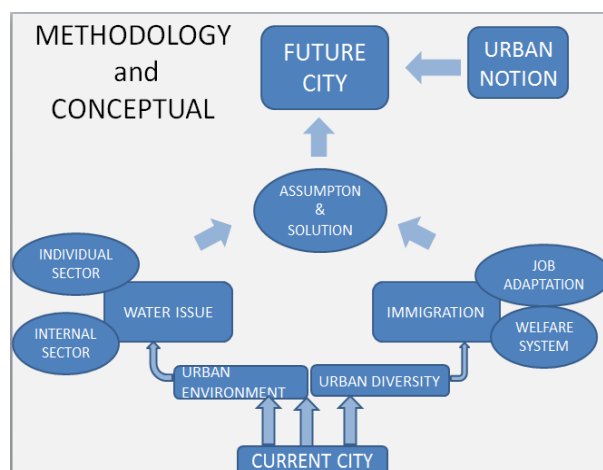
◆ 分科会 7・8 [未来の都市の姿と都市観]

都市を構成する外的要素と内的要素の議論の後に、学生が考える未来の都市について考察し、そこにおける住民一人ひとりが持つべき観念「都市観」について議論しました。持続性、エコ開発、共存の 3 つをキーワードに未来の都市を定義し、未来においても予想される都市問題に対して、住民側による主体的なコミットメントの可能性について提言しました。互いの理解構築が都市にお

ける住民の帰属意識に繋がり、ムーブメントを起こすきっかけになると結論づけました。当テーマの一番重要な議論であったので、とても困難なものでした。

◆ 分科会9 [プレゼンテーション作成・発表練習]

今まで議論してきた内容をスライドとして作成し、プレゼンテーションの準備をしました。予め毎議論後に報告会用のスライドを作っておいたことが生きて、この時間においてはスライド修正するだけで良く、発表練習に時間をまわすことができました。テーブルチーフはスライド構成と引用先の表示、原稿作りを担当し、スライドのほとんどは参加者により作成されました。最後まで主体性を尊重することができ、良い最後の分科会でした。



⑤ 分科会まとめ

会議中の議論では、都市の定義を考えることに続いて、都市における環境問題（外的要素）についての議論から始まりました。発展途上国や先進国に関わらず存在する深刻な都市環境の問題の1つとして、水問題を取り上げました。世界自然保護機関（WWF）の2011年における発表によると、世界に存在する水資源の内人間が利用可能なものは4%であり、その60%が都市で利用されています。人口増加が続く都市において、水の供給量は年々増加しています。我々にとって水資源は生産活動や生存するために必要不可欠であり、持続的な水資源の利用方法を探るために、議論では水質汚染と水不足を主な問題として取り上げました。

加えて、都市問題を解決する上で考える必要がある都市の住民について考察するため、都市の多様性（内的問題）について議論しました。多様性を実現し一人ひとりが共存できるような都市創造のために、都市における移民問題に焦点をあて、どのように移民と現地人がお互いに干渉できるのかについて考察しました。

これらの議論を基に、都市における問題を乗り越えた後に実現する、私たちが考える未来の都市と、住民がもつべき都市観について議論を行い、報告会で発表を行いました。質疑応答や意見交換の場では、未来の都市への市民あり方

や都市を理解する上で、水と食料とエネルギーの3つの視点の相互関係について考える必要性など、とてもたくさんの参考になる考えを得られました。これからの日本のみならず世界において都市問題に関する理解が深まること、及びこのテーマを選び約2か月に及び学習を続けてきた参加者が、今後それぞれの舞台上で活躍する際にこの経験が生かして邁進していくことを、心から願います。

⑥ 個人の感想

第60回国際学生会議にテーブルチーフとして関わったことが、私にとってどれだけ意味があることであつたのかは言うまでもありません。第59回国際学生会議に参加者として参加した時のものから考えれば、2年間の集大成ということになるのかもしれませんが。

自らの力を試したい、そのような意志をもって参加した第59回国際学生会議では、国の枠組みを超えた議論で得た経験に加え、生涯続く出会いを得ました。このような経験を他の人にも体験してもらいたいその思いで実行委員として当会議に参加することを決めました。参加者と共に様々な不安や葛藤を乗り越え、最後のフェアウェルパーティーにて参加者と向き合った際の込み上げてくる涙から、心の底から国際学生会議に2年間関わられて幸せだったと確信しました。

改めて、関わった全ての参加者やこのような機会を与えてくださった全ての方々に感謝をします。それと同時に、この実行委員のメンバーだからこそ会議を成功させることができました。本当にありがとうございました。

この会議が後世に受け継がれていくことを祈ると共に、私も前を向いて自らの信じる道を進みます。それでいい、それをこの会議から学びました。



<参考文献>

GLAESER Edward “Triumph Of The City” The Penguin Press, 2011

テーブルⅡ

社会における芸術の価値とは？

—アートの可能性—

テーブルチーフ：山口 絵理子

①議題の背景

芸術と社会との関わりには、非常に長い歴史があります。その歴史は、もっと社会と関わり社会に貢献したい、という芸術と、芸術を通して社会問題を解決したり、社会をより良くしたりしたいという社会、両面から形作られてきたように思えます。

大まかには、美術館→パブリックアート→アートプロジェクト、という流れがあります。まず、美術館ですが、これは世界史上、フランス革命の際に、それまで貴族が独占していた芸術品を市民に公開しようという目的で作られた概念でした。それがいつしか、美術館に「行く人」と「行かない人」を分ける、芸術と社会との間に存在する壁のようになってしまいました。

その状況を危惧して、パブリックアートが誕生しました。パブリックアートとは文字通り、公共空間に置かれた芸術作品を指し、多くの場合はプロの芸術家によって作られたものです。プロジェクト的な要素は薄く、作品の制作過程

などはあまり重視されていません。美術館という箱を飛び出し、公共空間に出て行った芸術ですが、その場所に何の関係もない彫刻が景観美化という名目で無造作に置かれ、「彫刻公害」と呼ばれるなど、やはり問題点が存在しました。

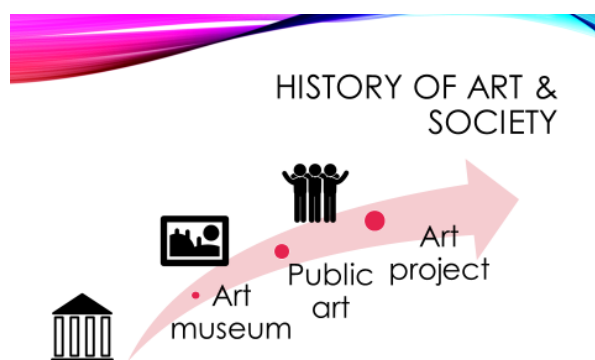
そんな中、「新たなパブリックアート」あるいは日本では「アートプロジェクト」と呼ばれるムーブメントが起きました。この概念はまだ新しく、はっきりとした定義はありませんが、特徴としては「完成した作品だけでなく、その制作過程を重視する」「芸術以外の社会の分野や、社会問題と積極的に関わる」などが挙げられます。有名な例として、瀬戸内トリエンナーレなどがあります。また、途上国支援や貧困解決をターゲットにしたアートプロジェクトもあり、一定の成果を上げてきています。

②背景を受けて

芸術を社会としてどのように扱ってゆくべきか、という問いは、中々答えの定まらない難しい問題です。芸術に関する公的資金の拠出や、公教育で芸術を扱うことなども、賛否が分かれ議論の的となっています。

しかし、そういった議論とは別に、芸術は新しい動きを見せています。それは、上述のアートプロジェクトです。プロジェクト形式であるが故に、今までよりも「芸術によって何が変わったのか」という成果が見えやすくなり、中には非常に大きな変化を生み出したものもあります。例えば、インドのウォールアート・プロジェクトは、学校に行く子どもの数を増やし、そして彼らをより活動的にするという成果を出しました。芸術が、スラム街を一大観光地に変えたという例もあります。特に途上国では不必要で、優先順位の低いものだと思われがちですが、実はそんなところにこそ潜在的な可能性が秘められているのかもしれない、ということを示す良い例です。

こうした、アートプロジェクトまでの流れを踏まえ、今の社会で芸術がどのような価値を發揮しており、そして未来の社会で何を変えうるのかを考えることを、テーブル2のゴールとしました。また、途上国でも發揮できる価値があると確信し、場所を限定することなく普遍性をもった結論を出せるような議論を目指しました。



③事前勉強内容

◆参加者招集会

応募開始から 1 か月、ついに参加者と対面する参加者招集会がやってきました。前日から準備を行い、大きな不安と期待を持って迎えた日でしたが、終始和やかな雰囲気の中進めることができました。午前中は、全員が事前に用意したスライドを用いて英語で自己紹介を行い、緊張しながらも自分について話しました。そして午後は、テーブルテーマへの導入として、芸術の定義を話し合いました。今回のテーマの根幹となる「芸術」は、人によって定義が異なりやすい、非常に曖昧な概念です。しかし、議論する土台として、共通の理解が不可欠であるため、初めに個々人の定義を発表してもらい、その後すり合わせを行いました。その結果、「人間が、心にあるものを、受け取り手の存在を認識した上で行う、五感を使って認識できる表現」が定義であるという結論に至り、その過程で「人間が作る」「受け取り手が存在する」「五感で認識できる」ということが芸術の本質的な要素だということで合意しました。そして最後に、勉強会に向けてどのような調査をするべきかに関するアイデアを出し、参加者招集会は終了しました。

◆第 1 回勉強会

7 月 10 日、東京・渋谷の DHC コミュニケーションスペースで第 1 回勉強会を行いました。4 人の国内参加者に、途上国支援と芸術、日本のアートプロジェクト、美術館、生活と芸術という 4 つのテーマを振り分け、自分の調査内容を発表してもらいました。

途上国支援と日本のアートプロジェクトについての発表では、芸術を通して何らかの社会的成果を挙げたものを例にとり、なぜ芸術がそのような成果をあげられたのか、他の問題解決アプローチとはどのように違うかを話し合いました。結果、途上国であっても先進国であっても、芸術が社会に提供できる価値には共通点があること、芸術を通じたアプローチの利点が明らかになりました。

美術館については、美術館の成り立ちや歴史、社会的な取り組みなどを調査し、美術館がどのように成立したか、現代においての役割は何かなどを話し合いました。最後に、生活という芸術というテーマについては、既存の芸術の分類を学び、美術館よりも生活に近いと言えるパブリックアートの例を挙げて、次の勉強会への足掛かりとしました。

また、一部の時間帯を除いて、全員が参加できたので、共通の理解を深めることが出来ました。

◆第 2 回勉強会

8 月 7 日、第 1 回と同じ会場にて、第 2 回勉強会を行いました。美術館につい

での調査で、現代の美術館は教育プログラムを有していることが判明したため、今回は芸術教育とそれが人々や社会に与える影響を、調査の対象に加えました。

途上国支援については、国を超えて行われる芸術を通じた活動には、文化的な衝突など悪い面も存在するのではないかという疑問をもとに、インドで行われたプロジェクトに参加した方にインタビューを行い、活動に実際に参加した人がどのような感想を抱いたのかを聞き取りました。また、日本のアートプロジェクトについては、前回よりもどのような「成果」が出たかという部分に焦点を置き、そしてそれがなぜ起こったのかを考えました。

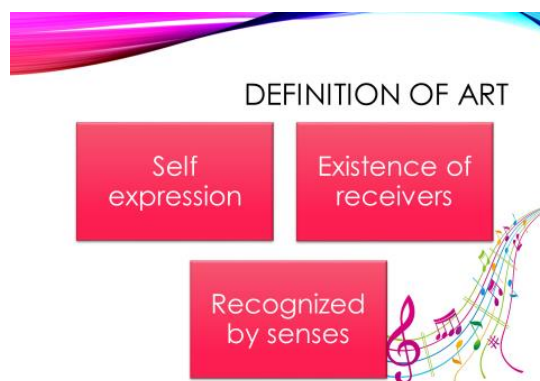
芸術教育に関しては、様々な研究結果があるものの、どれも因果関係を証明することが難しく、教育を通してアートと社会に影響を与えるという主張をするのは難しいと感じました。しかし、教育は非常に身近でイメージのしやすいテーマであるため、自分たちがどのような影響を受けたかを話し合うことが出来ました。最後に、パブリックアートの成り立ちと現在までの状況を共有し、パブリックアートには様々な良い面と悪い面があることを明らかにしました。

そして、最後に、本会議までに必要な調査と海外参加者に調査してもらう内容を決め、事前勉強会を締めくくりました。

④本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

国内参加者・海外参加者、そして実行委員を含めた全員が初めて集まる顔合わせでは、まず全員が簡単な自己紹介をしました。その後、「自分を表す言葉を3つ」紙に書いてもらい、その言葉について発表し、そして他の参加者が質問をする、という流れを繰り返しました。オンラインで話したことがあるとはいえ、やはり初めて直接会うということで多少緊張はしていたようですが、和やかな雰囲気ですべてを終えることが出来ました。



◆分科会 2 [今までの流れと目標の確認、定義のすり合わせ、芸術教育の現状]

本会議 2 日目から始まった本格的な議論の始めにはまず、テーブル全体としての目標を確認し、最終的なゴールは「芸術が『社会』でどのような価値を発揮することが出来るか」を明らかにすることであると改めて共有しました。そして、国内参加者が参加者招集会で行ったのと同じように、芸術の定義を確認しました。国内参加者が出した結論をもとに海外参加者の意見を取り入れ、全員が納得できる定義を見つけ、” Art is an expression of the people themselves have in mind. They recognize the existence of receivers and the receivers can recognize the expression by the senses” という文章を共通理解として設定しました。

その後、議論への導入として、海外参加者が自分の国における芸術教育の現状について発表し他の参加者はインプットを行いました。そして、まとめとして、芸術教育によって起こりうる良い影響とその理由を書きだし、芸術教育には実利的な影響や、人と人を繋ぐ役割があることを発見しました。

◆分科会 3 [美術館の現状と役割]

この分科会では、美術館の歴史や、各国の美術館の現状を共有しました。その中で、芸術教育同様、美術館の数やそれに対する人々の態度は国によって差があること、また日本にある美術館の数は他国に比べかなり多いことなどをインプットすることができました。

そして、美術館が社会にどのような良い影響を与えているのかをブレインストーミングし、それをカテゴリーに分けました。例としては、” protect artwork” “give financial benefit” “help people learning” “promote tourism and city-brand” “give place to relax” などが挙げられます。

◆分科会 4 [パブリックアートの現状と役割、問題点、美術館との違い]

美術館の次に起こった運動であるパブリックアートとは、名前が表す通り「公共の場におかれた芸術作品」を指し、美術館にある芸術作品との様々な違いがあります。この分科会ではまず、各国のパブリックアートの状況を共有し、公共の場における芸術への寛容さは国によってかなり異なることや、パブリックアートが問題を引き起こすこともあることなどを学びました。

その後、美術館とパブリックアートの違いを書き出しました。例えばパブリックアートでは、より多くの人々の目に作品が触れることが出来メッセージを伝えることもできますが、その作品を見たくない人も見ることになってしまいます。この話し合いでは、それぞれの違いが良い点にも悪い点にもなりうること、美術館にもまだ大切な役割があることなどが分かりました。

◆分科会 5 [アートプロジェクトとは何か、アートプロジェクトの例の紹介]

パブリックアートまでの流れを理解した上で、最も新しい動きである「アートプロジェクト」についての議論を始めました。この概念は非常に新しいもので、明確な定義はまだ存在しません。そこで、現在行われているアートプロジェクトの特徴を理解し、その特徴を持つものをアートプロジェクトに含めるという方法で、話し合う範囲を決定しました。

「アートプロジェクト」という言葉は、用語としては現在日本でしか使われていませんが、同じ類のプロジェクトやイベントは様々な国に存在します。そこで、今まで同様各国のプロジェクトについて共有したところ、国が違っても似たようなプロジェクトが存在すること、そしてプロジェクトの結果上がった成果にも共通点があることが分かりました。

◆分科会 6, 7 [未来の社会と芸術]

芸術教育に始まり、美術館からアートプロジェクトまでの流れを一通り追って理解を深めた後は、今までの議論の中で明らかになった芸術の価値がこれからの社会にどのような良い影響を与えてゆけるかを、参加者の自由な発想をもとに考えてもらい、その結果を、サマリー発表の練習もかねてパワーポイントにまとめてもらいました。ここでは、グループを2つに分け、テーブルチーフは議論に直接は入らず、ところどころアドバイスをしながら参加者主体で進めました。基本的には、現在の社会における問題点を洗い出した後、そういった問題を芸術がどのように改善してゆけるかを考える、という方法を取りました。



その結果、1つのグループは「地方の過疎化」の解決を例として挙げ、もう1つのグループは、芸術の果たせる価値を大きく3つに分類して、それが解決しうる問題として差別や戦争などを挙げるという形になりました。

2グループとも非常によく考えてくれたのですが、やはり芸術が例えば地方の過疎化や戦争など、非常に歴史と根の深い複雑な問題をそのまま解決できるという主張には論理の飛躍があると感じました。またこういった社会問題には、政治や経済、文化や宗教などありとあらゆる要素が関係しています。また、実際に

アートプロジェクトなどを運営している訳ではない学生の主張としては説得力に欠けます。そこで、最終的なサマリー発表では、「何を解決できるか」よりも、「『どのように』社会に良い影響を与えることが出来るか」に重点を置いて結論を出すことに決めました。

◆分科会 8 [4つのアートプロジェクトの事例分析、まとめ]

この分科会では、社会問題を先に考えるのではなく、実際に成果を挙げた発展途上国・先進国の4つのプロジェクトを分析しました。そこから共通した芸術の価値を探し、本会議中に話し合った全ての内容も加味して、最終的に芸術が「どのようにして」社会の問題を改善できるのかを5つに分けてまとめました。途上国と先進国、どちらの例も用いることで、普遍性を持った結論にすること、またなぜ他のアプローチではなく「芸術」がそのような価値を発揮できるのかを考えること、この2点に注意しながら議論を進めました。

その結果、「人々の協働を促進する」「人々の注意・関心をより強く引き付ける」「ものの見方、視点を変える」「自分をより良く表現することが出来るようになる」「言葉に関係なくメッセージを伝える」という5つの方法で、社会をより良くすることが出来る、という結論で意見がまとまりました。

◆分科会 9 [プレゼンテーション作成]

各メンバーの担当箇所を決め、プレゼンテーション作成を行いました。各メンバーが丁寧に作業を進めたおかげで、限られた時間ですが質の良いプレゼンテーションが出来たと思います。スライドに載せる内容と原稿は各メンバーに任せ、テーブルチーフはスライドのデザインを担当しました。

⑤分科会まとめ

「芸術の社会的価値は何か」。この深遠なテーマにこのような限られた期間で挑むことは大きな挑戦でありましたが、一定の成果を挙げられたと思います。きちんと、芸術と社会との関わりを時間軸に沿って追い、各々の個人的経験や価値観も合わせたうえで、芸術が、特に「アートプロジェクト」という最新のムーブメントを通して、どのような成果をどのように挙げているのかを明らかにすることが出来ました。

その上で、今後の課題として、今回明らかになった価値を未来の社会でどのように発揮していくべきか、どのように発揮できるかを考える必要があります。また、あまり芸術に興味がない人に、どのように芸術の価値を伝えるかという問題もあります。これらは、ぜひ各メンバーやサマリー発表に来てくださったみなさん、この事業報告書を手にとってくださったみなさんにも更に考えていっても

りたい内容です。アートプロジェクトにも、その他の様々な媒体にも、まだまだたくさん問題点、言い換えれば可能性があります。

芸術には社会的な価値があります。それが世界を変えるかどうかは、私たちひとりひとり次第ではないでしょうか。

⑥個人の感想

私は昨年行われた ISC59 に国内参加者として関わり、事業報告書には参加者の感想を載せて頂きました。今度は運営という立場からこのような素晴らしい経験をして、更に人の輪を広げ、自分の能力を上げていきたい、と考え、実行委員に応募することになりました。

そういった動機から始めた実行委員でしたが、参加者の選考や勉強会が始まるにつれて、より、他のメンバーのことを考えるようになっていきました。どうしたら、全員にとって最高の経験にすることが出来るだろう。どうやったら、参加者のコミットメントに見合う価値を提供することが出来るだろう。今まであまりチームとして何かに取り組む経験をしてこなかった私にとって、これは非常に新鮮で難しく、そしてやりがいのある経験となりました。

議論自体は、英語であることや、様々な国から参加者が集まっていることもあり、予想以上に難しいものでした。芸術という、抽象度の高い内容について、考えていることを上手く伝えて議論を進めるということは、英語に自信があった自分にも想像の何倍も難しいことでした。

議論の結果得た結論が、満点だとは言えないかもしれませんが、しかし、これが、私たちテーブル2の全員が2か月間かけて、ベストを尽くして出した結果です。ここから先は、また、各参加者に考えてほしいと思っています。

更に、議論の結果だけではなく、私は、私たちは、同じくらい大切な成果を得ました。それは、月並みですが、人との繋がりです。ただ友達になるだけではなく、一緒に濃い時間を過ごし、一緒に頭を悩ませた友達だからこそ得られた絆があると心から信じています。

この ISC60 で得た経験が、関わってくださった全ての人にとってかけがえのないものとなることを祈り、結びとさせていただきます。

本当にありがとうございました。



<参考文献>

吉澤弥生『芸術は社会を変えるか？文化生産の社会学からの接近』 青弓社ライブラリー、2008

熊倉純子『アートプロジェクト 芸術と共創する社会』 水曜社、2014

テーブルⅢ

情報化社会におけるマスメディアのあり方

—マスとソーシャルの融合—

テーブルチーフ：川原 陸

①議題の背景

近年、携帯電話、パソコンが各家庭に普及し、多くの市民がインターネットにアクセスできる環境が整備されました。大量の情報が生産、消費され、それらが極めて重要な価値を持つ、「情報化社会」の到来です。その中で、Twitter

やFacebookなどのSNSに代表されるソーシャルメディアがその存在感を強めてきています。チュニジアで発生した民主化運動が中東世界に波及した、いわゆる「アラブの春」は、SNSの影響力を世界中に知らしめました。また、2011年3月11日に発生した東日本大震災でもソーシャルメディアは活用されました。その利用方法は、家族・友人の安否情報などのパーソナルな情報と、原発における専門情報が主なものでした。

また、ソーシャルメディアの台頭に伴い、既存のマスメディアは頻繁に批判にさらされています。偏向報道、メディアスクラムなど個人の権利侵害、各界との癒着などがその具体例として挙げられます。

②背景を受けて

前述のように、ソーシャルメディアの台頭とともにマスメディアは衰退していく、という論調が流れることもしばしば見受けられます。しかし、そのことが本当によりよい社会につながるのでしょうか。東日本大震災においても、ソーシャルメディアは先ほど述べた利点とともに、根拠のないデマが拡散して社会に混乱をもたらすなど、発展途上のメディアとしての脆弱性を露呈しました。そのため、このテーブルでは伝統的なマスメディアがどのようにすればより社会に貢献できるものになるのか、また新鋭のソーシャルメディアとどのように調和することができるのかという議論をするべきだと考えました。

③事前勉強内容

◆参加者召集会

6月22日（日）、日本人参加者との初顔合わせの場である参加者召集会が開かれました。初対面であるため、最初からディスカッションを行うとあまり活発な議論にならないと考え、この日はアイスブレイクに重点をおき、まずはお互いのことをよく知り、打ち解けあうための日にすることを決めていました。具体的には、簡単な日本語での自己紹介のあと、「自分が今までにした最も印象的な経験」、海外渡航経験が豊富なメンバーであるため「今まで訪れた国の中で一番記憶に残っている国」などのテーマに対して英語でショートスピーチをしました。英語を気後れすることなく話すための練習と、相互理解を目的として行ったこのスピーチの甲斐があつてか、すぐに打ち解け合い、結束力を高めることができました。その後は、テーブルテーマに関してどのような分野、論点に興味があるかを把握するために、興味・関心を付箋に書いて出し合い、それをグルーピングして、それを元に次回以降テーブルの方向性を決めることを伝え、参加者召集会は終了しました。



◆第1回勉強会（7月19日@神戸女学院大学）

参加者召集会の活動をもとに、主に日本国内に関して、「閉鎖的な日本のマスメディア」、「日本のジャーナリズム」、「メディアリテラシー」、「情報操作、情報規制」、「マスメディアとソーシャルメディアの融合例」、「新聞産業」の6つのトピックについて、各自分担して調査を行い、第1回勉強会で発表しました。発表は各自5分間と短めですが、その後約30分内容についての質疑、ディスカッションを設けることで、発表の内容を全員がしっかりと理解した上で次に進むことができました。議論の結果、様々な知識と視点を得ることができました。具体的には日本には記者クラブという特有の存在があり、その歴史的経緯、存在意義、欠点などをさらに調査すべきであること、国内向けの内容が多く、国際問題について扱う割合が低いこと、イラク日本人拘束事件や福島原発事故などの報道で国内外の内容に相違がある報道落差問題、日本の新聞産業は海外と比べてもそれほど衰退しておらず、現在でも強い影響力を持っていること、カナダのオンタリオ州でのテレビや新聞などを題材にしたメディアリテラシー教育の内容などの知識を得ました。

また、本やインターネットを利用した調査には限界があるので、実際にメディアについて研究をしている専門家の方に話を伺うことを決定し、立命館大学国際関係学部の教授にお話を伺うことを決めました。

◆事前インタビュー（8月7日@立命館大学国際関係学部）

事前にテーブル内で話し合い、質問内容を準備した上で教授に話を伺いました。先生は実際に新聞記者として勤務されていた経験をお持ちだったので、とても説得力のあるお話を伺うことができました。まず、アメリカと日本のジャ

ジャーナリズムのシステムの違いです。アメリカでは発生した事実については通信社が行い、それに対する論評解説は新聞社が行うなど、分業が一般的であるのに対し、日本はその2つが比較的未分化であることを知りました。また、新聞やテレビなどの重要な役割の一つとして、情報に優先順位をつけることがあると分かりました。それにより、人々は多くの情報の中でも今何が争点になっているのかを把握することができます。また、負の側面ばかりが目立ちな記者クラブについても、誘拐事件発生時に人命・人権を守るための報道協定や、公的機関の保持する情報へのアクセスを容易にするなど、利点も多く存在することが分かりました。また、これからのマスメディアに求められることとしては、市民ジャーナリズムの養成について話されました。ソーシャルメディアは誰もが情報の発信元になる機会を提供しましたが、未だ発展途上であり、プロのジャーナリストと異なり責任を果たすこともありません。これからの社会では、英国放送協会（BBC）などが既に実施していますが、何十年にもわたって培ってきたジャーナリズムのノウハウやメディアリテラシーを市民向けに還元するプログラムを実施することが、伝統的メディアであるマスメディアには求められるでしょう。

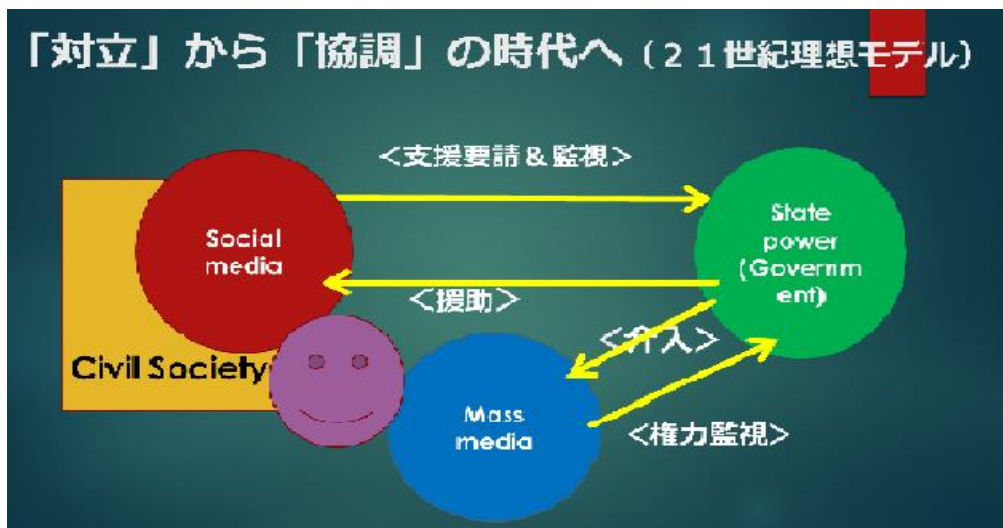
このインタビューを通して、ジャーナリズムの専門家の方のお話を聞き、有益な情報を得たとともに中立的な視点で物事を考えることが出来るようになったのではないかと思います。

◆第2回勉強会（8月16日@神戸市青少年会館）

第1回勉強会では主に国内のトピックが中心であったため、海外のメディア事情について、国家権力・マスメディア・ソーシャルメディアの3要素に注目して調査してもらいました。調査国は、NGO 国境なき記者団が発表している「報道自由度」のランキングを元に、上位国からオランダ、下位国からキューバ、また、アメリカ、イギリスといったジャーナリズム先進国、その一方でジャーナリズムの未発達なアフリカから南アフリカ共和国と5か国を対象としました。メディア体系の異なる5か国について情報を共有することで、幅広い視野を持ち、客観的に考えることができるようになることが目的でした。

この勉強会を通して、ソーシャルメディアとマスメディアが協同して市民に可能な限り客観的で正しい情報を届けるためのシステム作りと市民全体のメディアに関する意識、リテラシーの向上が最重要であるということに合意し、議論の軸としました。

「対立」から「協調」の時代へ（21世紀理想モデル）



④本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

国内参加者と海外参加者全員が揃い、初顔合わせを行いました。緊張をほぐし打ち解けあうために、「マトリクス自己紹介」を行いました。制限時間内に紙に自分の好きなもの、よくいく場所、興味のあることに関するキーワードを書き、それをさらに具体的に書き出します。（例えば、映画と書いたらトランスフォーマー、タイタニックなどのように具体的に書き足していきます。）その紙を見せながら、2つに分けられたグループでスピーチを行いました。参加者の皆さんは、最初こそ緊張した様子ですが、お互いのことをよく知ることができ、よいスタートを切ることが出来たのではないかと思います。

◆分科会2、3 [事前課題プレゼンテーション、興味関心の共有]

2日目から本格的にディスカッションがスタートしました。海外参加者には自分の国のメディア、国内参加者には日本のメディアについて、前述のマスメディア、ソーシャルメディア、国家権力の三要素に注目して調査を進めてもらっていたので、それをパワーポイントで共有した後、質疑応答とディスカッションを行いました。午後からは参加者召集会と同じ要領で興味関心についてブレインストーミングを行った後グルーピングを行いました。それによって、海外参加者の問題意識を把握することができました。その中で、特にニュージーランドやフィンランドなどはジャーナリズムや報道機関の独立が比較的保たれるような法律、システムが整備されており、実情の全く異なる他国にそのまま応用できるものではありませんが、これらの国の取り組みは議論の中で非常に参考になるものだと分かりました。また、メディアはどこの国にも存在し多種多様な為、1つのモデル国の問題を解決に導くという前年度の形式を取らず、

国家権力がある程度マスメディアに介入することを仮定し、そのような状況下で受け手である私たちがどのようにすれば公正な情報を得ることができるのか、また発信元であるマスメディア側もどのようにすれば客観的報道が可能になるのかを導き出すことを最終ゴールに設定しました。多くの国でマスメディアに対する介入は問題視されており、それを改善することが社会的利益につながると考えたからです。

◆分科会 4、5 [マスメディア・ソーシャルメディアの長所と短所について]

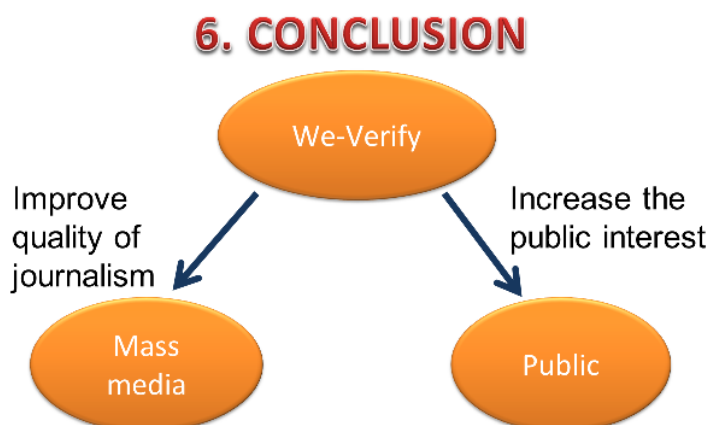
最終ゴールを達成するために、まずはマスメディア、ソーシャルメディアの特性を整理しました。両者を融合するためにはそれぞれの短所を補完しつつ、長所を最大限生かすことが必要であり、それを議論するための材料として、これらを議論しました。一部を取り上げると、マスメディアは世代を問わず幅広い年齢層に拡散し、即座に受け手に伝わるという長所もありますが、外部機関によって情報が影響を受けることや、視聴率や売り上げを重視するあまり誇張や歪曲といったことがしばしば問題になります。一方のソーシャルメディアは誰もが情報の発信元になれるので、災害時などにはローカルな情報もカバーできることや、双方向の議論が可能であることは長所ですが、十分な裏付けが行われぬまま情報が伝播することや、誤った情報が流されてしまうことが問題と言えます。このようなことは一見自明のように思われるかもしれませんが、これからのメディア体系を議論するにあたって問題点の整理をしたことはとても有益であったと思っています。

◆分科会 6、7 [マスメディア・ソーシャルメディアの融合について]

マスメディアとソーシャルメディア両者の特性を生かしていると考えられる機関をリストアップし、それらの特徴、メリット、デメリットなどを分析しました。具体的には、毎年1000万ドル規模の寄付を元に調査報道を行うNPO「メディア」ProPublica（プロパブリカ）”、ネット上の様々なソーシャルコンテンツを収集し、検証、発信する”Storyful”、学生とジャーナリストが協同して立ち上げ、ウクライナ報道に関して誤報や歪曲された情報がないかをチェックする（ファクトチェック）”StopFake.org”など様々な機関を調査しました。その結果、”StopFake.org”をモデルに、その他の機関の長所を統合し、新しい機関（We-Verify と命名）を提言しようという結論に至りました。



この機関はマスメディアの報道のバイアスを解消することを目的として、報道に偏向や歪曲がないかをチェックすることに特化しています。チェックするトピックは市民から意見を集め、特に関心の高い話題に絞られます。また、一般市民からの寄付によって運営されるため、市民がジャーナリズムに貢献していると感じ、自ら主体的に情報を集め、批判的に検証するメディアリテラシーの向上に繋がります。マスメディアは外部からのチェックを受けるので質の高い報道をしようと努めます。結果として、マスメディアと市民社会双方の質が向上されると考えました。



◆分科会 8～10 [プレゼンテーション作成]

前日までに議論は概ね終了し、サマリー発表に向けてパワーポイントと原稿の作成、発表練習を行いました。発表練習は深夜まで及びましたが、全員が最後の力を振り絞って発表に備えました。その甲斐あって大きなトラブルもなく、自信を持ってプレゼンテーションを行うことが出来たのではないかと思います。

⑤分科会まとめ

情報化社会におけるマスメディアのあり方というテーブル名ですが、急激に普及し、これからも重要な役割を果たすと予想されるソーシャルメディア、市民ジャーナリズムの可能性を議論することは不可欠なものでした。近年マスメディアに対する風当たりは非常に厳しくなっていますが、批判するだけでなく市民自らがジャーナリズムに積極的かつ主体的に参加することがこれからの社会では求められるのです。今回は1週間という限られた期間ということもあり、我々が提唱した機関の実現可能性に関する議論はあまり行いませんでした。しかし、市民ジャーナリズムの育成とマスメディアの一層の発展という価値観を得たことは、メンバー一人ひとりにとって非常に有意義だったのではないかと考えています。また、アメリカなどではこうした考え方は徐々に注目を集めてきていますが、他の地域では未だに十分な議論がなされていません。この発表を通して、少しでもメディアの将来に貢献することが出来ることを願っています。

⑥個人の感想

私は今までを思い返してみても何かの集団のリーダーとしてメンバーを引っ張ったという経験はほとんどありません。それだけに、第60回国際学生会議のテーブルチーフを務めるということは、私にとって今までの人生最大のチャレンジであったといっても過言ではありません。議論をまとめて要約し、整理し、ゴールに導くということはとても大変な仕事で、ましてそれを英語で行うとなると、難易度はさらに上がりました。しかし、今思い返すと自分が困っていたとき、議論が行き詰ってきたときなどピンチに立たされた時は常に仲間の助けがありました。その時、困ったときは積極的に仲間に頼ることの大切さを強く実感しました。

また、私が最初から最後まで心がけたことは全員が議論の流れをしっかりと理解して納得するまでは時間がかかっても次のステップには行かないということでした。少数の人が独走して議論を進めた方がスムーズに行くかもしれませんが、多様な価値観をもったメンバー全員の意見を尊重することが大切だと思ったからです。1人1人から意見を引き出すというのは想像していた以上に大変なことでしたが、ある程度目標は達成できたのではないかと思います。

他の実行委員のみなさんにも心から感謝したいと思います。私は途中から実行委員に加わり、右も左も分からないまま会議に参加しました。「情報化社会におけるマスメディアのあり方」というこのテーマの大枠を決定するのにどれだけ時間を要したか分かりません。しかし、毎回の実行委員会の度に助言や意見を言ってくれた実行委員のおかげで今の自分があります。やはり、仲間を持

つというのには素晴らしいことです。

最後になりましたが、実行委員のみなさん、参加者のみなさん、立命館大学の先生、後援、助成団体の方々、第60回国際学生会議に少しでも関わっていただいた全ての方々に最高の時間を心から感謝したいと思います。本当にありがとうございました。



テーブルⅣ

個人の権利が守られる範囲

—一人一人を尊重する社会を目指して—

テーブルチーフ：長岡 れいな

① 議題の背景

近年数多くの国々で子供の人権が守られていないことにより、きちんとした教育が受けられなかったり、受けられたとしても自分が望んでいた職種につけなかったりと人権は世界が抱えている問題の中で五本の指に入るぐらい早急に解決しなければならない議題です。そしてその内容は年々複雑化し、この問題の深刻さは明らかです。人権問題に関しては世界人権宣言を批准するだけでなく、民法で定めたりするなど、日本国も様々な策は講じていますが、事態は解決することなく、むしろ一向に悪くなってゆくばかりです。そしてこの人権というテーマは今世紀になって急激に悪化したものではありません。昔からの悪循環がどんどん積み積もっていくうちに、デフレスパイラルに飲み込まれてしまいこのような状況になってしまったことも私たちは理解しておかなくてはなりません。昔は人権と言えば一つの国家、または共同体間での問題でした。

しかし近年では一見なんの共通項も見いだせないグループ同士で人権差別のもめ合いが発生してきているように見受けられます。私たちを取り巻く環境特にこれからの未来を担っていくであろう子供たちの環境の変化が人権問題をさらに泥沼化してしまっているのです。

② 背景を受けて

私が入権問題というテーマの中でも特に最初にこのテーマを設定する導入ともなったのが、障害者に対する人権差別でした。性同一性障碍や性分化疾患を煩っているため自分が認識している性と実際の性が異なってしまうことにより公共の施設に入りづらかったり、子供であればどちらの性として学校で過ごしていったらいいのかわからず悩んでしまったりする子供たちがいるという事実を聞くたびに心が痛みます。これは普通の社会であるべきことではありません。人を蚊帳の外に追いやってしまっており、それぞれの人権が否定されてしまっているのです。このような状況が毎日なんらかの形で自身の身の回りで起こっているにもかかわらず健常者の目線では考えられていない現実に直面すると障碍だけでなく他の人権問題においても、人権が守られていない人々や共同体の負の連鎖が社会全体に悪影響をもたらしてしまっていると言っても過言ではありません。社会における人間一人一人のあり方を考え、すべての人々、特

にこれからの世界を担う世代の人たちが生活しやすい環境をこれから私たちは作り上げていかなければならないと私は実感しました。そしてそのためには、多くの国々の人々の実際の声を聞き、彼ら、彼女らの意見や方向性を取り入れていくことにより人権問題に対する新しい対応の仕方を導き出すことができるのではないかと考え、このようなテーマを設定しました。

③ 事前勉強内容

◆参加者招集会

参加者招集会では日本人参加者が初めて顔を合わせることから、お互いを知り理解し合うこと、これからの議論においてお互いを刺激し合える仲間になることを第一の目標としました。そのため、午前中のアイスブレイクでは他の人の自己紹介に対してたわいもない内容でも質問してみるなど、テーブル内のコミュニケーションを重要視しました。また、自分のプロフィールだけでなく、紙に書かれたテーマについて英語で少し話してみることにより、英語に対する不安を少し軽くし、議題討論に入りやすくしました。そして第二の目標はそれぞれが人権にたいしてどのような考えを持っているのかについてわかり合うことです。このテーブルは出身地や学部が比較的多種多様だったため、人権の捉え方も様々でした。議論の際、テーブルチーフはあくまで参加者のサポートであることを忘れないことを頭において行動していました。参加者には自分の発言にきちんと根拠を持つことやわからないことがあっても、自分がどこまで納得していてどこからわからないのかをほかの参加者にきちんと伝え共有していくことなどのアドバイスをテーブルチーフとして出しました。この時点での全体的な印象としては英語のレベルに多少差があるもののこの会議で自分がどのようなことを追求していきたいのかきちんとわかっている参加者であることを理解することができました。

◆第1回事前勉強会 早稲田大学早稲田キャンパスにおいて

参加者招集会終了時に参加者を三つのグループにわけ、それぞれのグループにおいて今人権問題として社会で問題となっていることについて調べそれらが引き起こしている問題について考えてもらう課題を出しました。それぞれのグループの発表終了後すべてのグループに一致する問題点や見解を考えていったところ、「社会の制約と新しい権利が共存できる社会とはどのような社会なのか」という論点が浮かびあがりました。それと同時に一つの権利について考えると今度はそれと関係性を持っていた権利やもしかしたら社会的義務に矛盾が生じてしまうという可能性も考えられます。このような議論の末、次回までに、新しい権利とは一体どのようなものが存在しうるであろうか、また社会的制約と個

人の人権にはどのような関係性があるのかについて考えてきてもらいました。

◆第2回事前勉強会 早稲田大学早稲田キャンパスにおいて

第1回勉強会の時に出した課題の発表をまず一人一人英語でもしてもらいました。このプレゼンテーションを通じてテーブルチーフの目線で感じたことはまず新しい権利について日本人参加者は、連帯権、承認権、国家を超えた権利という3つの大きな柱が新しい権利には存在することを導きだせたと思います。また社会の制約と新しい権利についてもただただ新しい権利を主張していくのではなく社会の制約と競合しすこしでも良い条件で権利を守りたいという方針であることも学びました。この2回の勉強会を通してテーブルチーフとしても日本人参加者側の意見をきちんとまとめることができ、これからくる海外参加者の考えを日本人参加者の考えと照らし合わせながら、ゴールへと議論を進めていくことができるのではないかと実感することができました。このときの勉強会のときに私が感じた不安要素はプレゼンテーションを行う時に作るパワーポイントにおいて文字の羅列が多く見ている人にとっては直感では理解しづらいものであったということです。

④ 本会議内容

◆分科会1 [アイスブレイク]

分科会1は参加者全員が初めて顔を合わせる場所でもあったため個人個人についてしってもらえるよう簡単な自己紹介をしてもらいました。今回私のテーブルは発展途上国からの参加があったため人権に対する熱意、そしてお互いに対する興味関心が旺盛で参加者の間で会話や笑顔が絶えずテーブルチーフとしては良い形で本会議を始めることができたと思います。またやる気を示してくれる参加者が多く、初日のアイスブレイクの時点でこれからの大体の方向性と分科会2でどのようなことを議論しまとめあげていくのかについてテーブルチーフ側から話をしました。

◆分科会2、3 [グループに分かれて人権問題について考え発表]

海外参加者と日本人参加者が初めてテーマについて議論していくこの機会に私が参加者に課した課題が3つのグループに分かれて「与えられたテーマに沿って自分たちでモデル国、モデル共同体を決めるなどして①なぜそれが問題となっているのか②どのような新しい権利を導入したらその人権問題は解決されるだろうか③その新しい権利を導入するにおいてどのような社会的制約と摩擦が生じるのか④その摩擦はどのようにして解消できるか」です。私はテーブルチーフ側でテーマをしぼってしまうことにより参加者の議論の幅を狭めたくなか

ったので「個人の権利について」「団体、共同体の権利について」「戦争、紛争地における権利について」という比較的抽象的なテーマにしてみました。また最終日には参加者が人前で話すことからグループごとにスライドを作りプレゼンをしてもらいました。個人の権利を調べたグループはモデル国を日本に設定し教育問題について、団体、共同体の権利を調べたグループは東ティモールと南アフリカ共和国をあげ、国家が抱えている問題の共通項、対立項を見だし議論していました。そして戦争、紛争地での権利のグループは子供兵の問題について議論していました。全体的にすべてのグループに共通していたことはまだプレゼン作りなれしていないけれど、ブレインストーミングをきちんとしていたので偏っていない四方から熟慮されたプレゼンができていました。



◆分科会 4、5 [テーマの融合]

前回の分科会で取り上げた 3 つのテーマのうち二つを比較して共通項やその二つを融合して考えられない理由について議論してもらいそして再びスライドを使って発表してもらいました。この作業を行うことによって自分たちが調べていたことに欠陥があったことや何を見直すべきかについて他のグループの考察を聞くことにより理解できている様子でした。実際のところこの分科会を終えて、参加社自体がこのようにこれからの議論を持っていきたいけれどどうなのだろうかと相談してくる光景が見受けられました。また日本人参加者の中には事前勉強会で私たちが引いたルールと少し海外参加者が意図しているルールがずれていることに気がついている人もいました。そのことから私は一度参加者のみで自分たちがこの先の方向性をどのように現時点で考えているのか共有してもらい参加者としてのこれからの方向性を導き出してもらいました。

◆分科会 6、7、8、9 [差別について 成果発表会に向けて]

参加者の考える方向性を確認した上で、ゴールを「差別をなくすために私たち

はどのように行動すべきか」に再設定し、そのゴールまでに私たちが踏まなければならないステップについて考え一つ一つ議論していきました。

1、 差別が起きている背景は一体なんなのか

この問題については今までの分科会で私たちが話し合ったことを振り返って考えました。ここで私たちは私たちが多様性を受け入れてないからだという結論に行き着きました。

2、 差別問題とは具体的にどのような問題なのか

ここで私たちはもっと世界的に一般的な問題について考えていくべきだと考え、特に私たちがその中でもすべての人に身近でかつ深刻な問題になっているのは何かと考えたところ、性別と人種だということに気がつきました。ペルーは南米の国で元々白人中心の国ではありません。そんな国でも今では雇用体系は白人のみという状況です。その他にもベトナムでは男性従業員を最低半分は雇用するために雇用人数をあらかじめ男女比で指定しておいたり、日本では性同一性障害者や性分化疾患が就職した後、就職先では自分が望む性とは違う性で働かなければならなかったりするという問題に直面しています。さらには、アメリカの大手企業 FedEx が男女の雇用人数に差をつけたりするなど、大手有名企業でも格差が生じています。

3、 この問題の解決策とは

私たちがこのような事態を見て提案した解決策は大きくわけて2つあります。一つ目が私たちは社会の一員であることを意識して行動するということです。全ての人がこの社会の一員であるのだから自分が格別なのではなく全ての人を受け入れるべきであると私たちは考えました。二つ目が人種、民族、宗教、性別などの生まれつきの事実で判断されるのではなく、人々が毎日生きていく上で身につけた能力で判断する社会にするべきであるという結論に至りました。

A right to be
ACCEPTED
by the ability



'RIGHT TO IDENTITY'

21

4、この解決策をどのように世界の人々、団体に伝えていくのか

私たちが考えた伝授法は、まずマスメディアを使って発信していくこと。そしてなるべく団体として発信していくこと。正当な方法で時には厳しい制圧を加えながら差別をなくしていくことが重要だと私たちは考えました。

⑤ 分科会まとめ

分科会を通じて感じたことはやはり打開策の検討は難しいということですが、海外参加者が特に発展途上国出身だったこともあり人権問題について強い意思と見解をもっていることからなんとか一瞬一つのテーマにおいて日本人参加者と外国人参加者が合意を得られたとしても、それが本当に腑に落ちていなかった場合、次の議論で再浮上するなど、議論を進めていくにあたってとてもディスカッションと調べ物には時間を費やしました。ディスカッションを重ねて行くごとに人権問題の闇はとて深いことを痛感し、なぜここまで人権問題が色々な方向を向いてしまっていてかつ深刻化し、時にはいじめや差別の影響で自殺に追い込まれてしまっているのかよく理解することができました。人権問題が取り巻く国家同士の対立、国内問題、家庭内問題などこれらは決して単体の問題ではなくしばしば融合してしまいます。そのためすべてを同時に解決することのできる策は存在せず、一つ一つ協和できる場所を探していくというステップ

を重ねることによって結果ゴールにたどり着くのだと私は認識しました。今回この分科会を通して私たちが達した結論はまだ通過地点にしかすぎなく、その先もまだまだ続いているかもしれません。しかし確実に言えることは多種多様な背景を持った学生が一同に集まり泊まり込みで一週間密に議論することは自分の意見を交換しつつ自分には持っていなかった問題意識が発掘され新たな価値観を見いだすことができるようになる機会であったということです。人権というテーマにおいても私たちが思いもよらない価値観が示され最初は戸惑ってしまったけれどもだんだんと議論を重ねて行くに連れて点と点が線となりひとつの大きな世界観となったのです。これからも数多くの価値観に出会うことにより点と点をつないだ線がどんどん大きくなり人権がとても身近な話題となりさらなる問題解決へと向かっていくと考えています。

⑥ 個人の感想

最初に自分がテーマを設定したとき今のゴールのようになるとは考えてもいませんでした。海外参加者や日本人参加者にテーブルチーフ自身の人権についての見解を訂正、補足される時もありましたが、このことにより人権問題の打開策は狭く浅いもので終わってしまうのではなく、ここまで上り詰めることができたのだと考えます。自分でテーマを設定して、参加者を選考し、参加者の性格や傾向などを理解し、ディスカッションを円滑に進めていくテーブル統一という役職は責任の重大さはとても大きいけれどもそれと同時に参加者と真に真正面から向き合った役職だったと思います。今回の議論がこれからの生活に少しでも役立てばと思っています。そして知らず知らずに周りで起きている差別にもっと気がついていきたいと思っています。





総務総括

総務部長 東口 未保

第 60 回国際学生会議は

『世界が向かう未来 ～「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと～』という総合テーマの下、7日間という日程での開催となりました。活動の中心となる分科会に加え、各国文化紹介や日本文化体験、研修旅行、各種パーティーなどのプログラムをたくさん盛り込みました。また、昨年新しく始めた「カフェトーク」というプログラムを今年も引き続き行い、テーブルの枠を超えて異なる文化を持ち合わせる者同士がお互いを知る素敵な時間を作ることができました。全体として、分科会ではしっかり議論し、その他プログラムでは十分楽しみ、メリハリのあるプログラム構成になったのではないかと思います。

本会議を終えるまでは参加者に本当に満足していただけているのか不安もありましたが、最後のフェアエルパーティーでは参加者の沢山の笑顔を見ることができました。また、次年度実行委員として携わりたいという声も聞くことができ、ここまでやってきたことの意義を強く感じるすることができました。

各プログラムをこれほど円滑に進行できたのはご協力していただいた各団体、参加者の方々の皆様のお力があつたからです。この場を借りて御礼申し上げます。

59 回続くこの会議の重みを再確認し、60 回目の今回、総務部長として携われたことに心から感謝します。

総務部長として至らぬ点多々あつたと思いますが、今年度の反省を踏まえ、今後の国際学生会議がより良いものになるよう、一層努力してまいります。参加者やご協力いただいた沢山の方々との出会いに心から感謝すると共に、この会議がこれからも末永く引き継がれていくことを願います。

最後になりましたが、第 60 回国際学生会議を無事閉会することができたのは、本会議のみならず、企画段階からご理解、ご支援、ご協力いただいたすべての方々のおかげです。第 60 回国際学生会議に関わってくださった皆様に心から御礼申し上げます。

以上を総務総括とさせていただきます。ありがとうございました。

各プログラム報告

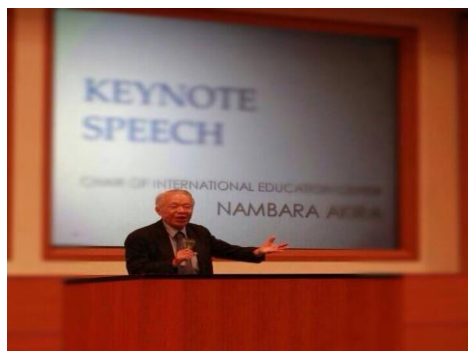
開会式

本会議最初のプログラムである開会式は、参加者全員が初めて顔を合わせる場となりました。2名の国内参加者が司会を務め、実行委員長による本会議開会挨拶、国内・国外参加者の各代表2名による参加者代表挨拶が行われました。各々の本会議に向けた心境、意気込みに聴衆は耳を傾け、気が引き締まる思いで第60回国際学生会議は始まりました。



基調講演

第60回国際学生会議開会式の基調講演は、国際教育振興会賛助会会長の南原晃様をお願いしました。ここ数十年間の世界の経済状況を踏まえ、どのように世界が変化しているのかというお話に加え、更なるグローバル化に向けてこのような会議に参加する素晴らしさもお話してくださいました。(写真左：国際教育振興会賛助会会長の南原晃様にお話を頂いた様子)



各国文化紹介

お互いの国について学ぶことを目的として、文化紹介を行いました。各国の基本的なデータの紹介に加え、ISC60 では参加者に国のお金、または国民の名前のテーマからひとつを選んでもらい、クイズを交えて発表を行ってもらいました。チームにわかれて互いに協力しながらクイズに答えることで、それぞれの国の知識を深めるだけでなく、参加者同士の仲が深まった場となりました。



日本文化体験

本会議 3 日目に行われた日本文化体験では、NPO 日本文化体験交流塾様にご指導をいただき、日本文化を代表する書道と浴衣を体験しました。書道では自分の好きな文字を書き、浴衣は自分たちで着付けをしました。男子は木刀で武士になりきり、女子は「さくら」に合わせて見事な舞いを披露しました。お土産には折り紙で作られた鶴と手裏剣をいただき、楽しい思い出と共に持ち帰りました。



Café Talk

分科会のグループ以外の参加者とも交流を深めることを目的とした企画です。前半は、各国のお菓子と遊びに関するプレゼンテーション、後半にはフリートークの時間を設けました。フリートークでは、プレゼンテーションのために各国から持ち寄ったお菓子を味わいながら、インターネット上では知ることのできないお互いの身近な習慣や文化について楽しくディスカッションを行い、互いに理解を深めることができました。



本会議研修旅行

本会議 5 日目の 8 月 29 日に行いました。午前中は全員で東京タワーを観光し、午後は 4 つのグループに分かれ、それぞれ浜離宮、東京国立博物館、江戸東京博物館、明治神宮をメインに観光しました。東京の名所を巡り、歴史を肌で体感し、また現代の日本の文化にも触れることができました。気分転換もでき、海外参加者、国内参加者ともに新たな日本の一面を知れる良い機会となりました。



成果発表会

国際学生会議では分科会で話し合った成果を一般に発信する場として成果発表会を行います。4 つのテーブルが 1 週間の集大成をプレゼンテーションに込めました。聴衆との質疑応答も活発に行われ、第 60 回国際学生会議で最も重きを置いていた「アウトプットを重視し、社会にインパクトを」という目標を達成することができました。また、後援をしてくださった CRT 日本委員会専務理事兼事務局長である石田寛様に基調講演をしていただき、本会議での学びと経験を振り返ることができました。(写真左：CRT 日本委員会専務理事兼事務局長石田寛様にお話を頂いた様子)



フェアコ



ウェルカムパーティーでは、これからの 1 週間を共にする参加者同士の仲を深めることを目的として企画しました。最初はお互い緊張もありましたが、食事を共にすることで次第に打ち解け合い、有意義な時間となりました。本会議最後のプログラムであるフェアエルパーティーでは、本会議中の思い出を写真で振り返りながら、歌ったり踊ったり、辛くも楽しい 1 週間を共に乗り越えた仲間との別れを惜しみ、涙する場面も多く見られました。国境を超えた確かな友情が感じられ、かけがえのない時間となりました。



閉会式

閉会式も開会式同様、国内参加者 2 名が司会を務めました。実行委員長による閉会挨拶の後、国内・国外参加者の各代表 2 名による参加者代表挨拶が行われ、1 週間の思いが溢れる参加者の挨拶に会場の雰囲気が和みました。国も言語も文化も思想も違う学生同士がお互いを理解し、心をつなぐことができたと感じられた瞬間でした。最後は全員で集合写真を撮影し、第 60 回国際学生会議は幕を閉じました。



第5章 感想

ISC60 の感想

ディスカッションに対するフィードバック

ISC60 の感想

札幌学院大学 黒川恵里子

私が ISC の存在を知ったのは、丁度 1 年前くらいでした。学生時代からずっと海外留学をしたいと思っていましたが、費用がかなり掛かるためなかなか踏み切れずにいました。そんな中、ふと国内でも何かできることがあるのではないかと思いつき“国際”“会議”“学生”、この 3 つのキーワードをインターネットで検索しました。すると、ヒットしたのがこの国際学生会議でした。HP を隅から隅まで読んで、“参加するしかない”と強く思いました。

テーブルテーマが発表されて、その中ではメディアについてのテーマに興味を持ちましたが、メディアについての知識はかなり浅はかでした。そのため、参加意欲は相当なものでしたが、一次、二次とある選考をパスできる自信は正直あまりありませんでした。それ故、合格と記されたメールを受け取った時は、何度も間違いメールではないかと目を疑いました。

6 月に行われた参加者召集会、2 回の勉強会、そして本会議を終えて ISC60 の感想を一言で表すと、“本当に素晴らしい経験と出逢い”という一言に尽きます。

世界中の様々な文化背景を持った参加者と一緒に議論をできたことは、本当に素晴らしい経験でした。多様な意見交換を通じて、自分の中の視野が広がり新しい発見が沢山ありました。それと同時に、英語を理解することの難しさや、議論内容の難しさから、スムーズに議論についていけないことにとっても悔しい気持ちで一杯になったこともありました。改めて自分の未熟さを、身をもって感じました。しかし、そんな時はテーブルメンバーの皆が助けてくれました。皆はいつも相談に乗ってくれて、励ましてくれました。そんな皆のお陰で無事最後のプレゼンを全員で作ることができたと思います。

参加者の皆は、様々な学生活動に携わっており、色々な角度から社会をよりよく変えたいという気持ちを持っていました。そのため、お話ししていて本当に興味深かったし、面白かったです。

ISC60 の皆と一緒にいたのはほんの少しの間でしたが、どこにいても私達は一つの大きな絆でつながっているような気がします。

ISC60 は終わりましたが、私の中では一つのスタートラインでもあります。議論の中で感じた自分への悔しさや、皆と話したときのワクワク感、全てをエネルギーに変えて社会を創る一人の人として成長していきたいと思っています。

ISC の皆、そして ISC への参加を応援してくれた沢山の方々、本当に素晴らしい経験と出逢いをありがとうございました。

実際に参加してみて思ったのが、拙い英語でも伝えようと思えば、伝わるということだ。

自分にとって英語が得意科目だったことは一度もないし、言わずもがな英語をまともに話したことなんて一度もなかった。そんな自分でも、何とかなつた。自分の英語力がディスカッションの足を引っ張ったことは否定できないにしても、「言葉の壁」というのは案外薄いのかもしれない。

はじめは本当に聞き取れなかった。話を聞くので精一杯。自分から話すのなんて、まあできなかつた。単語が出てこなくて、詰まっていって、” nice English ”とからかわれたほど。少しづれるが、紹介文に書いた「日本語は上手くないけど、英語もうまくない」というジョークも全く通じず、真面目な顔で「君は何人で、何ヶ国語が話せるの?」と尋ねられてしまったのも、悲しかった。

でも、不思議なもので、一緒に喋りながら、ご飯を食べる度に、意思疎通ができるようになっていった。嬉しかったのが、バカなことやっても通じたこと。どちらの方がよりクレイジーな顔をしてスプーンを舐められるか、という訳のわからない勝負や、「(男に対して)俺の肩で寝てもいいぜ」というジョークも通じた。もちろん、他にもここに書くべきでないようなことがたくさんある。

あたりまえだが、いろいろな国から来ているので、みんなの文化的背景がそれぞれ違って興味深かった。自分のチームでは人権を取り扱ったのだが、みんなそれぞれ自国の差別や人権侵害を取り上げて、ディスカッション盛り込もうとしたので、少々議論が停滞することもしばしばあった。その中には、ベトナムには南北で人々の対立があることなど、知らないことも多かった。また、ディスカッションとは離れるが、インドネシアではデートで彼女に風船をあげる風習があったり、フィリピンではグレープフルーツに醤油をつけて食べたり、クリスチャンは間食であっても食前に祈りをささげたりすることも知った。

最後に最も記憶に残った出来事について書く。自分は最後のプレゼンテーションで、質疑応答を担当した。質問も基本的に英語で、返答も英語でせねばならず、いわずもがなかなり緊張していた。その担当は三人いるが日本人は自分だけだったので、もし質問が日本語できたら自分が答えなければならない、などと考えてもいた。でも結局、きた質問は一つだけで、仕事が回ってこず、舞台の前で何もせずただ立っていた結果に終わってしまい、プレゼン終了後すぐ

にみんなに「ヒダカ、舞台でなにか仕事した？」とからかわれ、「ああ、俺はどこへ行ってもイジられるんだなあ」と軽く感動を覚えた。

Sakari Hanhimäki (Finnish)

I was asked by Ami Okamoto to write short essay about my impressions regarding ISC60 student conference held at august 2014 in Tokyo at Olympic memorial youth center. I was in table 3 – which covered mass media and social media issues.

The main conference committee members were nice and helpful right from the start. At times the regulations and schedule for conference seemed quite strict. For example you couldn't move around campus that much and it took lot of effort and time to get permission to leave the campus. I didn't mind it later but some members felt it as overbearing to be so restricted by time and location. Also getting usable internet connection was bit hard. Use of internet was quite important for us since research and most of the table work required use of internet connection. The Softbank Wi-Fi at the center didn't work at all. Committee members lent the Wi-Fi for us for short times. Eventually committee member went all the way to rent me a portable Wi-Fi router, I paid her in advance of course. I feel this was really heartfelt attempt help us with the internet-problem. Basically problem with internet was with the youth center infrastructure, not the ISC60's fault in any way. I just want to mention this because conference work really required free use of internet so it is something to pay attention to in future events.

As for tables, the table I worked in was organized really well. Every session was quite fruitful and our chief always came up with next step in the process. I heard some tables had quite hard time and they had to work more during evenings too, but I cannot really comment much about that. The assistant staff in our table was also really helpful in so many ways such as documenting whiteboard writing and posting in Facebook for us to use later etc.

Opening and ending ceremonies were also quite interesting and well planned, there was nothing to criticize. Only thing causing problems was the tight schedule, maybe day or even 2 would've given us more time to work,

especially the last evening before conclusion event was quite hectic and everyone stayed up very late.

Generally speaking the whole conference was really pleasant and interesting experience. Study tour was interesting and panel discussions were really fascinating for me. Especially the committee staff was really nice and heartfelt at all times, they were talkative and tried to help us, even if we asked help with complicated things. The whole experience in the ISC60 was something I remember and cherish years from now. I've already mentioned about the conference to many student friends in my country and I hope at least some of them apply following years as I did this year. I feel that conference really did what it's purpose was – we made good ideas for the future and many international friendships were forged during those conference days. I feel that those friendships and discussion in the conference will have effect on the future in many positive ways.

Juan Octavian Daniel Sidauruk (Indonesian)

60th International Student Conference (ISC60) was held from August 20th, 2014 up to September 2nd, 2014. ISC60 comprised of two major series, which were study tour and main conference. In the study tour, I along with three other international delegates from Israel, Taiwan and Indonesia, were in the group of Okayama study tour. The itinerary of the study tour program was to visit several tourism objects and do a lot of activities in the prefecture of Okayama, Hiroshima and Miyajima island.

On August 20th, in the morning, after arriving at Kansai International Airport, all international delegates were directed to their own group of study tour which had been determined and set by the committee. My group and I were directed toward Okayama by using the bus. We left for Okayama in four hours and thirty minutes. When we arrived at Okayama station, we were immediately greeted cordially by the committee and host family. At evening, we attended a welcoming party with local organizers which were the members of ISA Okayama and several study tour participants in a Japanese traditional bar.

On August 21st, the opening ceremony of a study tour was held in University of Notre Dame Seishin which consisted of introduction of the organizers, local participants, international delegates and alos Japanese cultures, such as karuta, fukuwarai, origami and Hanaichimonme. In the afternoon, delegates and local participants enjoyed the beauty of the historical tourist area in Kurashiki Bikan. On August 22nd, we headed to the Hiroshima prefecture by using a bus. After arriving in Hiroshima, we headed to the Hiroshima Peace Memorial Park which becomes an icon of this city as a tribute to all of the victims who passed away on the atomic bomb tragedy. At this memorial park, many Japanese and foreigners commemorate the tragedy of Hiroshima bombing on August 6th, 1945 annually. After that, we also headed to the historical museum of Hiroshima to learn further about the details of atomic bom tragedy in the past. In the evening, we went to the hotel to take a rest and interact with another participants and organizers/local committee.

On August 23rd, we headed to the Miyajimaguti port. We took the ferry to go to Miyajima Island and walked around to many historical sights in the island. There, we played a mission games to take pictures and try several Japanese traditional activities that had been predetermined by the study tour organizer. After that, we also got a chance to try a variety of local culinary of Miyajima and make our own Miyajima traditional rice scoop as a souvenir. On the afternoon, we went back to Okayama and gathered with the host family. On August 24th, we headed to the University of Notre Dame Seishin to carry out activities and play some games in order to interact with all participants and organizers. In the afternoon, we headed to Okayama Castle and Kourakuen Fortress, which are the historical legacies of the kingdom of Okayama. In the evening, we went to a pretty big restaurant to hold a closing ceremony and the study tour farewell party as well. It was a very nice farewell party but I found it as a very sad moment as well since I must be apart with those loveable and amazing friends. After that, all the local participants and organizers escorted me and three international delegates headed to Okayama station. We headed up the Shinkansen train to Osaka to meet the entire committee and another delegates on the main conference ISC60. In Osaka station, we all boarded the bus to leave for Tokyo in approximately ten hours.

On August 25th, in the morning, we arrived at the accommodation, which was National Olympics Memorial Youth Center in Yoyogi. In the afternoon, there was an opening ceremony for ISC60 main conference which was attended by a Japanese government institution's representative in the fields of economic and politics. At that time, we were also grouped according to the discussion group / table respectively. I was in the 4th table that focused on discussing about the protection of human rights in the international scope. At night, we carried out an entertaining welcoming party at one of the entertainment venues in Shibuya, Tokyo. The next day, we carried out the discussion in accordance with our own respective table. In the evening, we underwent a cultural exchange event. It was the moment for all of ISC60 delegates from various countries in the world to present and perform their traditional cultures. On August 27th, we also carried out some discussions until afternoon. In the evening, we attended the Japanese cultural presentation which was organized by the committee and local community. At that moment, we learned the way to wear traditional Japanese clothes (Kimono) and wrote Japanese calligraphy.

On August 28th, we returned to the discussion from 9 o'clock in the morning until late afternoon and continued with Cafe Talk at night. Cafe Talk was an event held for all delegates to know each other and also to know further about the committee personally deeper while tasting snacks from different countries there. On August 29th, we got a one-day of break for discussion, so we could take part in the Tokyo Study Tour. I was in the 1st group of study tour. The committee arranged itinerary to visit several tourist spots in some areas around Tokyo. First of all, we went to Tokyo Tower and enjoyed the scenery of Tokyo from the top of Tokyo Tower. Next, we headed to the iconic garden of Tokyo, which was Hamarikyu garden. It was a very peaceful and beautiful garden. We could experience the traditional way of drinking green tea (matcha) and eating a Japanese traditional cake. After that, we took a ferry to go the Asakusa district. We headed to the tourist sites and Asakusa Temple to take pictures together and buy some souvenirs. In the evening, all delegates and committees from various study tour group met again at the Tokyo Sky Tree. There, we took a picture together and spent time by doing some activities such as did the late-night shopping, had a dinner, went to the karaoke and walked around. On August 30th, we continued to have a deeper research and discussion about our table's topic.

The discussion was started at 9 am and ended at 10 pm. We also prepared a presentation that would be displayed on the final presentation session on the next day. On August 31st, all delegates attended a rehearsal for presentation until noon and in the afternoon we were presenting a final presentation which was witnessed by many invited guests, such as academics expertise, parents of participants and alumni of ISC. The next day, we attended the closing ceremony and farewell party in a big entertainment venue in the Shibuya. It was a very fantastic and remarkable moment but also considered as a sad moment as well since it would be our last day on ISC60. We danced, sang some songs, had a dinner, exchanged some souvenirs and took a photo together at that precious moment. On September 1st, in the morning, we gathered at the lobby of National Olympics Memorial Youth Center. Then, the committee dismissed the program of ISC60. After that, I along with another 12 friends continued to hang out and go to some locations near Tokyo, such as Shinjuku, Shibuya, Yoyogi and Meguro. On September 2nd, at 10 am, I went to the Narita International Airport to return to Indonesia. I am really grateful to be a part of ISC60 because it was a life-changing,

memorable and extraordinary experience in my entire life.

ディスカッションに対するフィードバック

CRT 日本委員会 専務理事兼事務局長
石田 寛

不透明で、不確実な時代の中で、資本主義の立ち位置や存在感がこれほどまで形骸化していくことに、私は今まで以上に危機感を持っています。資本主義が生み出した『負の遺産』をどのように解決に導く事ができるのかどうか、この地球中に生きている人類一人ひとりが力を合わせて、真剣に考え、実行していかなくてはならない喫緊課題です。

こうした状況において、この国際学生会議では、自主的に同じ志を持つ人々が日本だけではなく、世界から集い、『世界が向かう未来―「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと―』を総合テーマにして、以下の4つのテーブル（「都市の未来の創造」、「社会における芸術の価値とは?」、「情報化社会におけるマスメディアのあり方」、「個人の権利が守られる範囲」）で熱い議論を交わしていたことについて共感すると共に、いくつかコメントをさせていただきます。

1. 「都市の未来の創造」

このテーブルでは、議論していく過程において、都市の外的要素や内的要素、そして多様性（人口動態：移民と現地人の連携）や都市観といった多面的な切り口で意見を出し合ったことによって、次第に重要なキーワードを絞り込んでいくことに成功できたと思っています。特に「未来の都市の姿と都市観」の分科会において、持続性、エコ開発、共存といったキーワードが抽出できたことで、物事を俯瞰して捉えることに成功したと言えます。

そして、最終段階のまとめでは、都市の問題は、水の問題でもあることに結びついたことは、まさに今世界中で、先進国や途上国と関係なく喫緊の課題として議論しているテーマに合致しています。

このテーブルの最終発表をお聞きして、その場でコメントしたことは、以下の通りです。

今世界では、人間の生存と社会基盤の基礎となる水、食料、エネルギーの急激な需要がステークホルダー間のトレードオフや競合の起因となっていることを踏まえた上で、グローバルなサステナビリティの実現に向けて、この社会的需要に対しての最適な解決策が必要ではないかと考えているからです。つまり、水、食料とエネルギーを個別に議論して各の解を求めることよりも、水、食料とエネルギーの関連性（Nexus）を捉えて循環が上手く機能していくためにはどうすべ

きか議論していくことも一案として挙げさせていただきます。【ご参考：総合地球環境学研究所研究推進戦略センター】

2. 「社会における芸術の価値とは？」

このテーブルでは、芸術の価値について、社会にどのような影響 (IMPACT) を与えてきたのかを議論していく過程において、いくつかのカテゴリーに分けていました。私は、このカテゴリーの分け方 (Protect artwork, give financial benefit, help people learning, promote tourism and city-brand, give place to relax) に特性があってユニークだったからこそ、最終段階のまとめで、一気にテーブル参加者の間で共通理解を得ることができ、俯瞰して物事を捉えていくことに成功したと思っています。

社会における芸術の価値については、「人々の協働を促進する」、「人々の注意・関心をより強く引き付ける」、「ものの見方、視点を変える」、「自分をより良く表現することが出来るようになる」、「言葉に関係なくメッセージを伝える」という5つの方法で、社会をより良くする効果があると纏めていました。この5つの考え方は、まさに今「グローバル」と「ダイバーシティ」というテーマで多くの企業が直面している課題を解くカギになるのではないのでしょうか？皆さまの発表をお聞きして、芸術の価値とは何か改めて考え直す必要があると再認識できたのは私だけではないと思います。

3. 「情報化社会におけるマスメディアのあり方」

このテーブルでは、情報化社会が及ぼす社会的な影響力をもっとも持っているのはどこかといった切り口で議論を展開していった中で、情報リテラシーの向上がもっと重要だといふことにテーブル参加者の意見が集約できたことは素晴らしいと思いました。そして、纏めていく過程において、市民社会がマスメディアを単に批判するだけではなく、自らが積極的にかつ主体的に関与して、一緒に連携して活動することが大切だと結論に至ったこともこのテーブルの大きな成果に結びついたと と思っています。

この資本主義では、お互いに良い・悪いといった2つ軸で判断しがちになっており、「相対」的なアプローチ (Retributive) が主流になってきています。私は、この「相対」というアプローチではなく、「総体」的なアプローチ (Restorative) によってお互いに連携しながら、新たな共通価値を見出ししていく方が、更に大きなインパクトをもたらすことができると信じています。

4. 「個人の権利が守られる範囲」

このテーブルでは、当初「社会の制約と新しい権利が共存できる社会とはどのような社会なのか」という論点で権利について検討を始めていましたが、最終的に、「差別をなくすために私たちはどのように行動すべきか」に再設定できたことで、より具体的にブレイクダウンして考えていくことができたことは大きかったと思います。これは纏めにも記載されていましたが、参加者間で合意が得られたとしても、それが本当に腑に落ちていなかった場合、次の議論で再浮上して、何度も忍耐強く議論してきた証でもあります。この作業プロセスことが、お互いの人権を尊重している行為につながっていると言えます。

個人の権利、つまり、人権というテーマは、CSR 界において「ビジネスと人権」という国連のラギーフレーム (2008,2011 年) の枠組みの中で、いかにして、政府と企業が尊重、保護、救済を 3 本柱でステークホルダーが連携して取り組んでいくことが求められています。この課題を克服していくためには、皆様がこのテーブルで議論してきたやり方がまさにステークホルダーエンゲージメントというプロセスにおいても重要な役割を担うこととなります。

皆さまが、各テーブルのディスカッションを通じて、多様な価値観の中で議論して四苦八苦してきました。そして、限られた時間内で議論を纏めてきた苦労は、決してお金を払っても買えるものではないですし、これからの人生においても、大変貴重な体験をされたと確信しています。

最後に、私は常日頃から以下のことを念頭に置きながら、行動していますので、ぜひ皆様と共有させてください。

- ・ 自分を知り、他者を知り、そして世界を知ることができるか？
 - ・ 指示待ち型人間から脱却し、提案指図型人間へ脱皮できるか？
 - ・ 自由自在に発想を変えて、多面的な切り口で物事の本質を見抜けるか？
 - ・ ぶれない判断軸を持ちながら、決断できるか？
 - ・ 自らが課題の抽出、何をすべきか理解し、行動・実践できるか？
 - ・ 自分自身で自らのあるべき姿を磨き上げていくことが出来るのか？
 - ・ 世界観の中で、自らの立ち位置を把握しているか？
 - ・ 多様な価値観の中で、持論形成ができるか？
- ・ 自らの信念は、“自らを正し、誰が正しいではなく、何が正しいか” です。

これからも皆さまお一人ひとりが『世界が向かう未来—「これから」のために私達が「いま」考えるべきこと—』を念頭におきながら、自らの道を切り開いていくパイオニア精神を持ち続けていくことを祈念しております。

また、どこかで皆さまと再会できることを楽しみにしています！

以上

第 60 回国際学生会議 事業報告書

発行責任者：安田 洋介

編集責任者：丸田 尚道

発行：日本国際学生協会 第 60 回国際学生会議実行委員会
〒662-0891 兵庫県西宮市上ヶ原一番町 1-155
関西学院大学文化総部 I. S. A.

